

K-576

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第19集

宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

第 1 集

米沢城三の丸遺跡〔第1次調査〕

生蓮寺遺跡〔第1次調査〕

1987

米沢市教育委員会

宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

第 1 集

米沢城三の丸遺跡〔第1次調査〕

生蓮寺遺跡〔第1次調査〕

1987

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、昭和61年度住宅開発に伴なう米沢城跡及び生蓮寺遺跡についての発掘調査の成果をまとめたものであります。

本市の遺跡については、昭和60年までに383ヶ所発見されております。

昭和61年3月に遺跡名簿及び遺跡地図を作成し、開発関係諸機関等に配布したところであります。

このことにより開発者から遺跡の詳細確認の申請があり、発掘調査を実施した二遺跡について本報告書といたしましたところです。

米沢城跡については、検出された建物の柱穴や礎石、土師器や陶器等から鎌倉期～江戸期にかけての住居跡と推察されます。

又、生蓮寺遺跡については、表採によって縄文前期初頭の遺跡であることがわかり、調査を実施したところ、堅穴住居の柱穴と考えられる遺構數十基と羽状繩文・撚糸文・ループ文の土器が検出されました。加えて米沢市大字入田沢の戸長里窯跡から出土した桃山期から江戸期にかけての陶器と同じ陶器が検出され、当時の歴史的背景や窯業生産に関する貴重な資料を得ることが出来ました。

本市教育委員会では、これらの貴重な資料を整理しながら、歴史と古代文化を探究し、豊かな住みよい郷土を築くため、埋蔵文化財の保護保存にいっそう努力する所存であります。

本調査にあたり格別のご指導ご協力を賜わりました山形県教育庁文化課、地権者の宗川巧業様、石井秀明氏、相田建設様、地元の皆様、さらに本市市史編纂室に対し、心から感謝申しあげます。

昭和62年2月

米沢市教育委員会

教育長 北目二郎

例　　言

I 本報告書は昭和61年（1985）度に本市教育委員会に申請があった周知された土地（遺跡範囲）内での開発行為31件の中で緊急発掘調査として調査を実施した米沢城三の丸遺跡・生蓮寺遺跡についての第1次発掘調査報告書である。

II 発掘調査は米沢市教育委員が主体となって、宗川巧業株式会社（米沢城三の丸遺跡）、石井秀明氏（生蓮寺遺跡）との協議のうえ、米沢城三の丸遺跡を昭和61年4月18日～同年4月24日、生蓮寺遺跡を昭和61年5月15日～同年5月22日までに実施した。

III 調査体制は下記の通りである。

◎米沢城三の丸遺跡	◎生蓮寺遺跡
調査総括 安部敏夫（社会教育課長）	調査総括 安部敏夫
調査担当 手塚 孝	調査担当 手塚 孝
調査主任 菊地政信	調査主任 菊地政信
調査副主任 橋爪 健	調査副主任 橋爪 健
調査補助員 原 三郎 蔡田清二 梅津久夫	調査補助員 原 三郎 蔡田清二
調査協力 宗川巧業株式会社・石井秀明・相田建設株式会社・米沢市市史編さん室	
調査指導 山形県教育庁文化課	
事務局 平間重光・梅津幸保・金子正広	

IV 採図の縮尺は造構を30分の1、40分の1、60分の1、土器類、陶磁器の実測図と拓影図を2分の1、石器は1.5分の1、礫器は2分の1、木器を2.5分の1とした。写真図版はスケールで示した。北は真北に統一した。

V 本遺跡より出土した遺物については、整理し、米沢市教育委員会（仮称）米沢市埋蔵文化財資料室に一括保管する。

VI 遺構等の土色については『新版標準土色帖』（小山、竹原1973）を参考にした。

VII 本書の作成は菊地政信・手塚孝・橋爪健が中心となり、梅津幸保・金子正広が補佐し、編集は手塚・梅津、責任校正は金子がその責務に当った。

本文目次

序文

例言

住宅開発等に係わる遺跡確認について	1	生蓮寺遺跡第1次調査の発掘	
米沢城跡三の丸遺跡第1次調査の発掘		I. 遺跡の概要	22
I. 遺跡の概要	3	II. 調査の経過	23
II. 米沢城跡の変遷	3	III. 検出された遺構	23
III. 調査の経過	5	(1)縄文時代の遺構	24
IV. 検出された遺構	5	(2)中世から近世の遺構	24
(1)建物跡	5	IV. 検出された遺物	24
(2)堅地層と遺構	7	(1)石器	25
V. 検出された遺物	7	(2)土器	27
(1)土師質土器	7	(3)その他	28
(2)陶磁器	8	V.まとめ	29
VI. まとめ	8		

挿図目次

三の丸遺跡第1次調査の発掘

第1図 三の丸遺跡第1次調査位置図	11
第2図 米沢城下絵図	12
第3図 三の丸遺跡第1次調査遺構平面全体図	13
第4図 三の丸遺跡第1次調査B Y 1平面図(1)	14
第5図 三の丸遺跡第1次調査B Y 2・3平面図(2)	15
第6図 三の丸遺跡第1次調査B Y 4・5平面図(3)	16
第7図 三の丸遺跡第1次調査Z Y 6平面図(4)	17
第8図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図	18
第9図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図	19
第10図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図	20
第11図 三の丸遺跡第1次調査出土木器実測図	21

生蓮寺遺跡第1次調査の発掘

第12図 生蓮寺遺跡周辺の地形図	33
------------------	----

第13図	生蓮寺遺跡第1次調査区遺構平面全体図	34
第14図	生蓮寺遺跡第1次調査区 D Y 1 ~ 3 平面図	35
第15図	生蓮寺遺跡第1次調査出土繩文土器拓影図(1)	36
第16図	生蓮寺遺跡第1次調査出土繩文土器拓影, 陶磁器実測図(2)	37
第17図	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(1)	38
第18図	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(2)	39
第19図	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(3)	40
第20図	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(4)	41
第21図	生蓮寺遺跡第1次調査出土礫器, 石製品, 実測図	42

図 版 目 次

第1図版	三の丸遺跡第1次調査の発掘	発掘前全景, 発掘区全景
第2図版	三の丸遺跡第1次調査の発掘	プラット確認状況, T Y 15・16, Z Y 24セクション
第3図版	三の丸遺跡第1次調査の発掘	T Y 13, T Y 12の根固め石
第4図版	三の丸遺跡第1次調査出土の陶磁器	
第5図版	三の丸遺跡第1次調査出土の陶磁器	
第6図版	三の丸遺跡第1次調査出土の木器	
第7図版	生蓮寺遺跡第1次調査の発掘	発掘区全景
第8図版	生蓮寺遺跡第1次調査の発掘	D Y 3セクション, D Y 2セクション
第9図版	生蓮寺遺跡第1次調査出土の土器	
第10図版	生蓮寺遺跡第1次調査出土の土器, 陶器, その他の遺物	
第11図版	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器	
第12図版	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器	
第13図版	生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器, 石製品	

付 表 目 次

第1表	昭和61年度遺跡確認状況一覧表	2
第2表	三の丸遺跡第1次調査遺構年代概念表	9
第3表	三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器観察表	10
第4表	三の丸遺跡第1次調査出土木器観察表	10
第5表	生蓮寺遺跡第1次調査出土, 石器, 剥片, 磚器分類表	30

住宅開発等に係わる遺跡確認について

昭和61年3月、米沢市教育委員会は、本市の開発関係課の職員を招集し、埋蔵文化財の包蔵地を示す『米沢市遺跡地名表』及び『米沢市遺跡地図』を配布するとともに、文化財保護法の趣旨にもとづき、文化財保護の意義、法律内容、事務手続き等についてレクチュアをおこなった。

これは、米沢市教育委員会の永年の課題であった「周知の遺跡」(文化財保護法「第57条の2 土木工事その他埋蔵文化財の調査以外の目的で、貝づか、古墳その他埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地……」)について、具体的な措置をなさずに今日までできたのであるが、ようやく財政措置がなり、実現したものである。

遺跡の数は、今日確認されているもので386ヶ所(『米沢市遺跡地名表』刊行時は383ヶ所であったが、その後新たに3ヶ所発見されたものである。ちなみに、山形県教育庁文化課が昭和53年に刊行した『山形県遺跡地図』では、米沢市の遺跡はわずか96ヶ所であった)を数えるが、今後とも増える可能性は極めて高い。

その大半は縄文時代の遺跡が中心であり、弥生時代のものは極めて少なく、古墳時代・奈良・平安時代・中世とつづく。

以上述べたことから、本市は県内でも有数の古代遺跡の宝庫であり、これに対して何らかの開発計画、開発行為があった場合は遅滞なく教育委員会担当係と協議することを要請した。

以後、担当係に協議を求められた、遺跡に係わると予想される確認依頼件数は、別表通り31件に達した。

その内訳は次のようである。

建築確認申請にかかるもの	22件
砂利・碎石採取にかかるもの	3件
道路・水路工事にかかるもの	3件
農園等の土地造成にかかるもの	2件
消防防災施設整備にかかるもの	1件

このうち発掘調査を実施したのは4件、うち1件は県の事業にかかるものであり、これは県教育庁文化課が調査を行った(経塚山遺跡)。本市教育委員会が発掘調査したのは、「米沢城址三の丸遺跡」「生蓮寺遺跡」「矢子大日向遺跡」の3件であるが、本報告書はそのうちの「米沢城址三の丸遺跡」と「生蓮寺遺跡」についての報告書である。

第1表 昭和61年度 遺跡確認状況一覧表

No.	遺跡名・地区名	時代	開発内容	確認年月日	確認結果
1	外ノ内遺跡	縄文中期	防火貯水槽工事	61. 4. 8	工事立会い
2	大海老ヶ沢b遺跡	縄文	砂利採取	61. 4. 11	遺跡範囲外
3	(太田遺跡)	縄文中期	家屋増築工事	61. 4. 15	"
4	米沢城跡遺跡	中世～近世	宅地造成工事	61. 4. 15	発掘調査実施
5	生蓮寺遺跡	縄文前期	家屋新築工事	61. 4. 18	"
6	(松原遺跡)	縄文前後期	宅地造成工事	61. 4. 22	遺跡範囲外
7	(西明寺遺跡)	縄文	家屋増築工事	61. 4. 22	"
8	荒川遺跡	縄文・平安	宅地造成工事	61. 4. 25	慎重工事
9	大浦a遺跡	縄文・奈良	家屋新築工事	61. 5. 7	"
10	中谷地a遺跡	平安・中世	物置新築工事	61. 5. 21	工事立会い
11	米沢城跡遺跡	中世～近世	宅地造成工事	61. 5. 21	慎重工事
12	三合目館遺跡	中世	宅地造成工事	61. 5. 28	"
13	館山b遺跡	縄文	宅地造成工事	61. 5. 28	工事立会い
14	馳上b遺跡	奈良・平安	家屋増築工事	61. 5. 28	遺跡範囲外
15	遠山遺跡	縄文	宅地造成工事	61. 6. 4	慎重工事
16	台ノ上遺跡	縄文前中期	宅地造成工事	61. 6. 10	工事立会い
17	荒川遺跡	縄文・平安	家屋増築工事	61. 6. 10	慎重工事
18	東屋敷遺跡	奈良・平安	家屋増築工事	61. 6. 10	"
19	大樽遺跡	縄文	宅地造成工事	61. 7. 3	"
20	(笠原遺跡)	奈良・平安	砂利採取	61. 7. 8	遺跡範囲外
21	八幡堂遺跡	縄文	宅地造成工事	61. 7. 14	調査済(S58年)
22	矢子大日向遺跡	縄文・奈良	果樹園造成工事	61. 7. 16	発掘調査実施
23	# 大日向塚遺跡	中世	家屋増築工事	61. 7. 16	" (S62年予定)
24	台坂遺跡	"	農道整備工事	61. 8. 8	慎重工事
25	経塚山遺跡	"	農免道路工事	61. 8. 8	発掘調査実施
26	大塙遺跡	縄文	水路工事	61. 8. 26	用賀後調査
27	大塚山遺跡	"	倉庫新築工事	61. 8. 26	工事立会い
28	(東屋敷遺跡)	奈良・平安	宅地造成工事	61. 9. 2	遺跡範囲外
29	(中谷地a遺跡)	平安・中世	碎石採取	61. 9. 2	"
30	(築沢地区)		家屋新築工事	61. 10. 11	"
31	米沢城跡遺跡	中世～近世	果樹園造成工事	62. 1. 27	慎重工事

**米沢城三の丸遺跡〔第1次〕
調査の発掘**

I 遺跡の概要

本遺跡は米沢城としての範囲、本丸、二の丸、三の丸の一部を含めた南北が560m、東西は600mの336,000m²を遺跡としている。この範囲は1985年に米沢市教育委員会が発行した米沢市遺跡地図に示したものであり、米沢市街地における唯一の理窟文化財包蔵地となっている。今回の発掘地点は現況の地図第1図で示した箇所で、米沢城が機能していた享保10年（1725）の上杉文書城下絵図では、二の丸東南コーナ部に近い、三の丸に当たる。この絵図に示された米沢城の形態について確實にいえる事は明治2年（1869）までの形態である。その後は部分的に堀や建物等が変容を重ね今日に至っている。なお米沢城が機能していた時期及び創建年代からの変容については次の項で述べたい。三の丸については昭和20年代までは部分的に残存し、その面影を偲ぶ事ができたが現在は皆無である。

第1図に示した範囲が現代の米沢城「松ヶ岬公園」で本丸、二の丸南側の地域に相当し、本丸には上杉神社・福德稲荷神社・稽照殿等が、二の丸部分南側に上杉記念館が位置す。かつての二の丸大手門通りは山形県立米沢工業高等学校がある。この通りは春の上杉まつり会場として市民に利用されている。標高は本丸で250m、土壘の最も高い所で254m、二の丸、三の丸は南側で249m～250m、北側で248m～249mと南から北へわずかながら傾斜している地形で、米沢盆地全体から見れば西南端部の場所に位置す。

II 米沢城跡の変遷

米沢城は、『米沢市史』（1944年）によれば、長井時代に築城されたと言えられる。

「文治5年（1189）頼朝奥州泰衡を征す。此時長井左衛門大江時廣供奉し、彼泰衡が與賊の武将良元が據る所の御館山（羽前南置賜郡中津川村）の柵を攻めて之を亡す。頼朝その功を賞し即ち当郡を賜う。此においてか此城を築く。」

という記事が『米沢里人談』にあることを紹介し、さらに、

「時廣が今の中沢市松ヶ岬公園の地に米沢城を築きたるは四条天皇、暦仁元年（1238）の頃なりと称せらる。」

とある。城は、「松ヶ崎城」、「松ヶ岬城」などと称せられたといわれるが、明らかではない。上記の長井時廣が暦仁元年（1238）に築城したというのもまた明らかではない。そもそも長井氏が論功行賞により長井庄を所領したものの、果して長井氏自身がここに居住していたかについても一切不明である。長井氏は『尊卑分脈』等の資料によれば、長井氏8代のうち5人は「関東評定衆」という鎌倉幕府行政機関の要職にあり、米沢に居住していたとは考えられない。

長井氏は、天授6年（1380）伊達氏8代宗遠によって滅ぼされ、米沢は伊達氏の版図に算入されたが、実際に伊達氏が米沢に居住し、ここを本拠としたのは天文18年（1549）15代晴宗からといわれており、その在城期間も17代『独眼龍政宗』といわれた伊達政宗が、天正19年（1591）に

豊臣秀吉によって陸奥岩出山に転封されるまでのわずかに42年に過ぎない。

以上のことから、長井氏時代には確証はないものの、今日の米沢城の原形らしきものが造られ、その後伊達氏が何らかの手直しはあったと考えられるが、城並びに城下の様子を知ることのできる資料はほとんど無いに等しい。ただ政宗が、天正19年（1591）に陸奥岩出山に転封される際に、米沢城下の六町（桐町、柳町、東町、立町、大町、南町）の主だった町人を殆ど「伊達御供」として一緒に移っていることから、少なくともこれだけの町並はあったことは言える。

米沢城並びに町並の様子が多少分かるようになるのは、慶長年間からである。即ち、会津若松120万石の大名上杉氏が、関ヶ原の役において反徳川方にいたため領地を削封され、米沢30万石として移封されてからのことである。上杉氏の所領は、出羽長井郡18万石余、陸奥伊達・信夫2郡11万石余の合わせて30万石となった。ただ問題はその間に板谷峠（750m）という隘岨を境としていることが大名として領国支配に不安定さを残したことは否めない。さらに米沢盆地は四周を山に囲まれており、交通の便に恵まれず、年貢米・特産物の江戸及び上方への搬出に大きな労力と経済的負担を負ったため、経済の発達には少くからぬ制約があった。従って、その領国は甚だ閉鎖的な開発度の低い部類に属するものであった。

このような領地において新たな生きる道を見出さねばならなかった上杉氏は、まず府城の増築と城下の拡張に取り掛かった。

上杉景勝は慶長6年（1601）11月米沢に入ると、とりあえず二の丸を普請して、これに居住した。その後慶長9年（1604）に門・堀・櫓などの改築拡張を始め、更に慶長13年（1608）5月から外曲輪を造営し外濠を掘り、城西に堀櫛川（堀立川）を穿った（上杉家記）。本丸と二の丸の修復もこの時に行なわれたと思われるが、その規模本丸四方8、90間、二の丸北方170間、南方180間、東西200間であった（米府鹿子）。藩政を遂行する役所は二の丸に置かれた。以下、慶長13年追廻馬場、元和9年に本丸に式代、広間、台所、寛永元年に御座之間、同7年に二の丸に寺院を造営するなど、次第に城郭としての姿が整備されてきた。

城下の拡張工事は慶長13年（1608）城郭増築と共に着手され、翌年更に大規模に行なわれた。慶長13年、二の丸の小城を三の丸に拡大したとき、從来二の丸の周辺にあった町屋を外濠の外に移し、その跡に家臣の屋敷を割り出した。侍屋敷の割替は慶長14年、直江兼続の指図により、平林正恒を奉行として実施された。その工事は三郡から夫役を徵し、東は福田から西は館山まで、南は七軒町から北は土橋まで作業を行ない、土地を平坦にしてその土を低所に運んだ。この侍屋敷の割替工事は翌慶長15年から慶長16年にわたりほほ出来上がったが、その結果、米沢城下の拡大は城郭を中心にしてその西に伸び伊達時代には米沢城とは別個であった館山城地域も、その侍屋敷に含まれるに至ったのである。大別して大・中身の武士は三の丸に配置され、小身のものは郭外に置かれ、その多くは城西に面して配置されていた。

今回の発掘調査を実施した場所は、上記の三の丸であり、城の東南にあたる。ここは古くは「谷地」であり、町名としても「北谷地小路」「南谷地小路」として残っていたことからも明らかである。14世紀に相当する出土した遺物があることから、ここに長井氏時代の住居が在ったものと考えられるが、精査面積の狭隘な事により、その性格は今一つ判然としない。

〔参考文献〕『藩制成立史の総合研究 米沢藩』藩政史研究会編 吉川弘文館

『米沢市史』

III 調査の経過

今回の調査は宅地造成に伴なう緊急発掘調査であり、関係機関と協議を重ね4月18日から6日間の予定で調査に着手した。調査の対象となった地域は宅地及び畠であったので我々は比較的調査しやすい畠を調査区にえらんだ。というのは宅地に利用されていた地点はコンクリート等の基礎が土中深く掘られて構築されすでに遺構等がこわされているとの判断からであった。調査は当初5m×5mの範囲を重機によって表土剥離を実施した。表土は整地の為に客土された山砂で約30cm位であった。その後は遺物（陶磁類）含む層であることから人力で掘り下げた。その結果第3図で示したセクション理解されるようにゴミステ穴、立木のバッコン穴が確認され、ゴミステ穴は出土した遺物から昭和時代まで使用されていたことが判明した。

4月21日までに面整理、精査、遺構確認が終了した結果、掘立建物跡の柱穴群、礎石建物跡の礎石が重複して確認され、これらの遺構は確実に各方向に延びると予測されたが、前述した理由から東側だけに拡張したにとどまった。最終的な調査範囲は東西7m、南北4mの28m²であり、4月23日までに柱穴群の根固め石の取り上げをのぞいて終了、これは24日の現地説明会を考慮したものである。根固め石および柱穴の下に配した敷石はねばりの強い土壤に深く入りこみ、取り上げに苦労した。その後北側壁下にトレンチを配し、地山まで堀り下げたこの層から頁岩の小礫を発見したが石器とは認識されなかった。

IV 検出された遺構

調査範囲が極めて少ない事もあって、遺構の全容を把握することはまず不可能である事を付け加えておく。遺構の確認される層位は2・3層下部からであり、主に建物跡と考えられる柱穴・礎石跡等25基が検出された。ここでは建物跡を中心に述べてみたい。

(1) 建物跡〔第3図～第7図〕

二枚の文化層より認められる。柱穴自身の切り合い状況を吟味すれば少なくともⅦ期以上の建物群が当地に存在した事は明らかである。柱穴の形状、埋土の状況や土質、それに間尺等を検討した結果、5棟の建物を確認することができた。また相互の切り合い関係より、Ⅰ期～Ⅶ期の年代と区分する事も可能である。ただし、検出された遺物が極めて少く、明確な年代を推測することは困難であった。その点も考慮し、古い順に説明を加えたい。

B Y 1 [第4図]

東西方向に T Y 16・T Y 9・T Y 7 の 3 基の柱穴が認められる。第 4 層面を掘り込んだ柱穴は南北長に近い楕円形プランを示し、埋土にシルト層と玉砂利層の混合層を加えている。柱痕跡は約 20cm であり、基底部に円礫を配するのを特徴としている。間尺は T Y 16・T Y 9 間が 9 尺、T Y 9・T Y 7 間が 6 尺となっている。このことは米沢市上浅川遺跡第 I 次、II 次調査で検出された B Y 1・B Y 2 と同様な底を有する建物跡と考えられる。年代的には T Y 16 の埋土から土師質の赤焼系土器底部片が二点検出している。底部切り離しが糸切りを有する环とみられる。底部の厚さや切り離し技法から漠然ではあるが、10世紀～11世紀前後に加わることは確かである。I 期。

B Y 2 [第5図]

T Y 12～T Y 14 の 3 基の組み合せを B Y 2 とした。不整の円形プランを示す柱穴は 50cm～70cm、深さ 20～30cm を有し、先の B Y 1 と同様に柱穴底面に偏平な円礫をもつ。埋土はシルト層と砂利層の他に根固め用の河原石を多量に埋納するのを特徴としており、T Y 13 から唯一柱根が検出された状況から推測すれば、柱を立てた後に河原石を回りに配して固めてからシルト等の埋土を配したものと思われる。同じ様な例はやはり上浅川遺跡から検出している。年代的には遺物が認められない以上、推測することは奇跡に近いが、上浅川の例を参考にすれば 13 世紀前後位に属するであろうか。間尺は 8 尺等間隔である。II 期とする。

B Y 3 [第5図]

円形プランを示す T Y 11 と T Y 3 の二基が存在する。T Y 3 の東側および北側に柱穴が認められないことから西から南にかけて建物が位置するものと考えられる。柱穴は両者とも 35cm 位であり先の B Y 2 と同様に円礫を柱穴の根固め石としている。間尺は約 6 尺で、検出した確認面等から B Y 2 よりは若干新しい時期に位置するものであろう。従って III 期とした。

B Y 4 [第6図]

柱穴を浅く掘り、柱穴内に偏平な土台石を設置する方法であり、先述した B Y 1～3 よりさらに発展した形態と言えよう。東西長を主軸とする建物跡は T Y 17・T Y 4 を中心にして、北に 4 尺の底と西に 6 尺の底をもつ。北と西の底はコーナ部が切れる特徴を有するもので、米沢市内では上浅川遺跡の B Y 1・B Y 2・B Y 3 (12世紀～14世紀) と比丘尼平遺跡の 1 号建物跡 (8 世紀末) がある。この中で上浅川の B Y 1・B Y 2 が二面底の建物跡、同 B Y 3 と比丘尼平遺跡の建物が四面底を有している。米沢城三の丸遺跡の B Y 4 に関しては形態的に上浅川遺跡の B Y 3 に類似していることから四面底を有する可能性が高い。柱穴の大きさは 37cm～58cm であり、平面形状は円形もしくは楕円形プランを示す。中心をなす基本的な間尺は 8 尺等間隔と考えられる。年代は一応、土師質土器から 13 世紀～14 世紀前後としておく。IV 期とした。

BY 1 [第4図]

礎石を有する建物跡である。これまでの東西方向の建物とは異り、南北長を呈する。東西梁行1間の12尺（6尺+6尺）を有し、南北間は不明であるが間尺6尺をなす。礎石に用いられた河原石は安山岩質が主で、円形及び楕円形礎を選出している。大きさは30cm~42cm位であり、おそらくは松川から運搬したものであろう。さて当市内では礎石を有する建物跡はこれまでに上浅川遺跡第1次調査で検出されたZY 1が唯一となる。ZY 1は今回のZY 5と同様に梁行1間×桁行6間の東西長の建物である。ただし、同じ礎石を呈しても、先のBY 4の様に柱穴を掘り下げた後に円礎を埋設して、最終的に礎石を有するもので、形態的にはBY 4の発展したものとも考えられる。そして、独立して礎石を有する様になったのが、今回のZY 5と推測することも可能であろう。年代的には上浅川遺跡が13世紀~15世紀（14世紀頃か）前後と考えているので、本遺跡発見の建物跡は少なくともそれ以前となる。Ⅳ期としておこう。

(2) 整地層と遺構

第3図に示した調査区北面の断面図は後世の攪乱が著しいこともあって、層Noを任意に使用したものである。今回検出された遺構の大半は層No 2・3・5・6・9・10の底面より掘り込んでおり、現密には層No 4を掘り下げている。ただし、埋土の中には層No 3を含んでいるⅣ期もあり年代的差位が有することは明らかである。また、礎石をなすZY 5は層No 9・10・3・2内に存在する。問題になるのはシルト層を中心とした層No 9とシルト層に多量の砂利を含む層No 10・2・3の所在である。両者にはさらに木炭や焼土を含んでおり、明らかに人意的な方法で埋め立てたものである。米沢城のルーツは今だ厚いペールに包まれているのが現状であるが、上記の土砂を整地層と考えた時、米沢城の建設や改修工事との関係をあらためて考える必要がある。しかも整地層の下面にはより古い遺構も数多く残っており、それらも含めて今後の課題となろう。

*手塚 季 菊地政信 (1985)「上浅川1次・2次調査報告書」「米沢市埋蔵文化財調査報告書」
第14集 米沢市教育委員会

V 検出された遺物

今回の調査で得られた遺物はI層からIII層の整地層出土で占める。検出した遺構内部からの出土としては柱穴(TY 9・16)より小片の土師質土器2点があるにすぎない。出土した遺物は陶磁器類・礎類・木器類に区分され、総数420点を数える。礎類は土台石や根固めに使用されたもので自然石をそのまま利用している。その事から図示しなかった。次に陶磁器類・木器類の順で説明を加えたい。なお陶磁器類は図上複元が可能なものだけについて実測図を作成した。

(1) 土師質土器

上記の2点と遺構確認面IV層上面より4点が出土している。いずれも破片で回転糸切り後回転調整を加えた底部片5点、胴部片1点で内面に黒いススが付着したのが1点ある。焼成は素焼で

やわらかく、器厚は平均0.5cmを測る。色調は赤白色で胎土は微砂も含まない良質の粘土を使用している。器高は不明であるが底部から直線的に外反する壺と推測される。年代は胎土や焼成さらにTY 9・16の柱穴形態を考慮し、10世紀から11世紀前後に位置づけたい。米沢地区で10世紀代の遺物としてはこれに近い例として（10世紀代）八幡原Na24遺跡等13号土壙より出土があるにすぎない。これはこの時代の遺跡を発掘調査した例が少ないと最大の原因であり、今後の調査によっては類例も増加しこれらの遺物に対する年代の位置づけが整理されてゆくものと期待しておこう。

(2) 陶磁器〔第8・9・10図〕

第1表の観察表で示すようにほとんどが近世・近代で占められる。実測図には器種別ではなく系統・産地別に分類した。以下、代表的な器種について説明し、明細は第1表を参照願いたい。

染付碗〔第8図3～5〕

3は内外面に網目文様を有す碗で、高台裏の文様は鉢を文様化したものであり、胎土は白く細かい。同様の文様を持つのが東京都文京区動坂遺跡から出土している。今回の資料は底部だけであるが底部の計測は同一である。米沢の上浅川遺跡第3次調査区からも同一の遺物が出土した。

染付皿〔第8図7・8・14・19〕

伊万里系と相馬系に大別できる。19はドイツ製須を使用（明らかに明治以降の製品である）。

青磁水瓶〔第9図17〕

仏神具として使用されたものであろう。底部の形状から水瓶と理解される。産地は不明。

擂鉢〔第10図23〕

幅のせまいくし目が全面に施された形態で、口縁部にだけ釉がかけられた成島焼の製品。

キッタテ〔第10図24〕

他にも3点出土しており、全製品とも米沢の成島焼である。陶土の中に混じる砂が多い。

木器〔第11図1・2〕

多数確認された柱穴群の中から1本だけ出土している。木目の観察から檜材と想定したい。

VI まとめ

下記に示した表は今回の調査区より検出された遺構・遺物を吟味しおよその年代を想定したものであり、検出された遺構群はすべて17世紀以前、平安時代中期から中世に位置づけたい。しかるに現在の米沢城周辺には平安時代中期ごろから人々が居住し、集落を構成していたのはまちがいない事実である。調査地点は粘質土の地山で人々が居住する以前は湿地帯であったことが出土した植物遺体から理解され凹凸を有す地形であった。これは松川や鬼面川の作用によって形成されたものであろう。しかし松川上流域の石垣町や柏平地区に認められる大形の礫や砂利などは認められず、洪水という多少の危険はあったにしろ、水利や肥沃な土地は水田や畠を耕作するには

都合のよい場所であったことは容易に想定できよう。

米沢城の本丸を調査しないかぎり、本丸にも上記の年代に位置する遺構が存在するかはわからない。たとえ、遺構や遺物が確認されても、それがいつの時代にだれによって構築されたのか問題となろう。しかし今回の調査結果は資料の少ない中世を語る上で貴重であり、米沢城の創建期を論じる糸口を提供してくれた。すなわち、現存する米沢城本丸周辺には、上杉・伊達・蒲生・長井の各時代以前にそこに「館」をかまえた人たちの存在がほんやりと見えてきたような気がしてならない。最後に今回の調査にあたり御協力いただいたみなさまに深く感謝申し上げます。

第2表 三の丸遺跡第1次調査遺構年代概念表

遺構	年代	米沢の領主
中世	I期 11世紀～12世紀（平安時代中期から平安時代末）	○長井時代（191年間）
	II・III期 12世紀～13世紀（鎌倉時代初期から南北朝時代初期）	1189～1380
	IV期 13世紀～14世紀（南北朝時代から室町時代中期）	（文治5年～天授6年）
近世・近代・現代	V期 15世紀～16世紀中頃（室町時代中期から室町時代末）	○伊達時代（211年間）
	16世紀末～17世紀初（室町時代末から江戸時代初期）	1380～1591 （天授6年～天正19年） ○蒲生時代（8年間） 1591～1598 （天正19年～慶長3年）
	庭園や畠に利用していたと思われる。 ↓ 現在は宅地	○直江時代（4年間） 1598～1601 （慶長3年～慶長6年） ○上杉時代（263年間） 1608～1871 （慶長6年～明治4年）

第3表 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器観察表

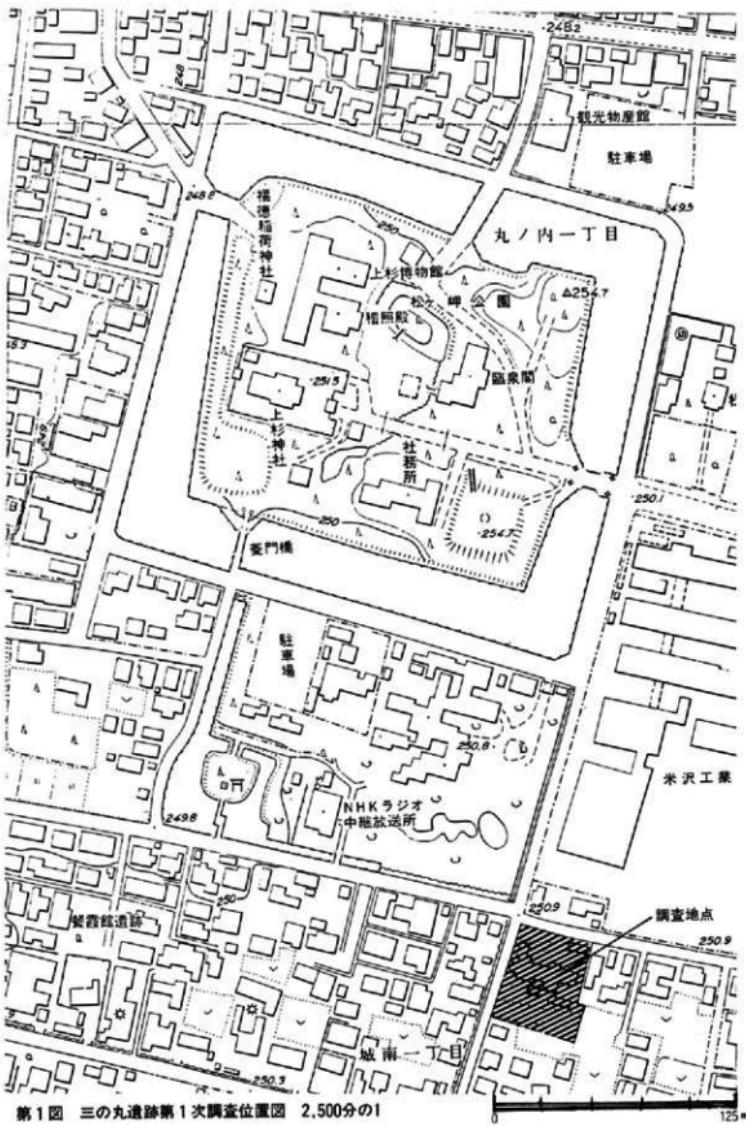
辨団番号	品種名	出土地	系統	産地	時期	計測値			備考
						口径	底径	器高	
第8図3	染付碗	第1次調査区	古伊万里	九州伊万里地方	19世紀前半	—	4.2	—	網目文様
第8図4	染付碗	第1次調査区	伊万里		19世紀後半	—	3.7	—	草花葉文様
第8図5	染付碗	第1次調査区	伊万里		20世紀初頭	5.0	—	—	
第8図6	そば猪口	第1次調査区	伊万里		20世紀前半	7.8	—	5.0	草花葉文様
第8図7	陶器小皿	第1次調査区	伊万里系		20世紀前半	9.6	3.8	2.9	春花雷文様
第8図8	染付皿	第1次調査区	本郷上新系	福島県会津地方	20世紀初頭	14.2	7.2	2.4	
第8図11	陶器小皿	第1次調査区		大堀相馬焼	19世紀後半	11.3	4.8	3.0	
第8図14	染付皿	第1次調査区	唐津系		不明	—	4.8	—	
第8図19	染付皿	第1次調査区		地方窯	20世紀代	13	3.5	—	ドイツ具須
第9図10	陶器小壺	第1次調査区		相馬焼	19世紀後半	—	—	—	
第9図9	茶碗蓋	第1次調査区		大堀相馬	20世紀代	6.5	4.8	—	種にベンガラ
第9図16	陶器皿	第1次調査区	京焼	坂窯	19世紀後半	9.2	—	—	
第9図15	陶器碗	第1次調査区	瀬戸系		20世紀代	—	3.5	—	
第9図20	陶器酒杯	第1次調査区			20世紀代	5.0	2.7	2.8	
第9図17	青磁水瓶	第1次調査区	青磁		19世紀後半	—	8.2	—	
第9図18	緑釉鉢	第1次調査区		京楽焼	19世紀後半	13.5	—	—	
第9図22	灰釉皿	第1次調査区			19世紀後半	17.1	—	—	
第9図21	片口	第1次調査区			20世紀代	22.7	—	—	
第10図23	擂鉢	第1次調査区		成島焼	20世紀代	35	—	—	
第10図24	キッタ子	第1次調査区		成島焼	19世紀後半	14.8	—	—	
第10図12	陶器碗	第1次調査区		成島焼	19世紀後半	5.6	—	—	
第10図13	灯具	表塚		成島焼	19世紀後半	4.6	5.1	5.1	

第4表 三の丸遺跡第1次調査出土木器観察表

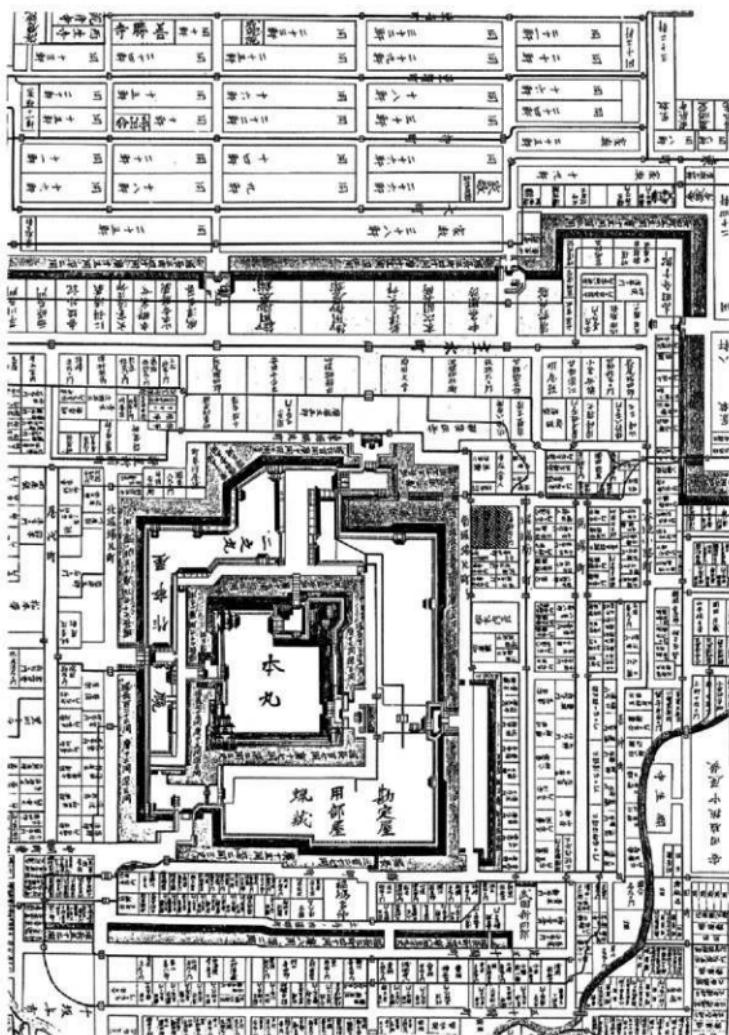
辨団番号	出土地	器種	材質	長さ	太さ	備考
第11図1	第1次調査区T Y12	杭	栗材	(46cm)	6.2cm	尖状部を整形している
第11図2	第1次調査区T Y13	柱	檜材	(25.6cm)	(5.5cm)	太さは推定12~15cm

○辨団番号と図版番号は同一に統一してある。

※()は現形を表示



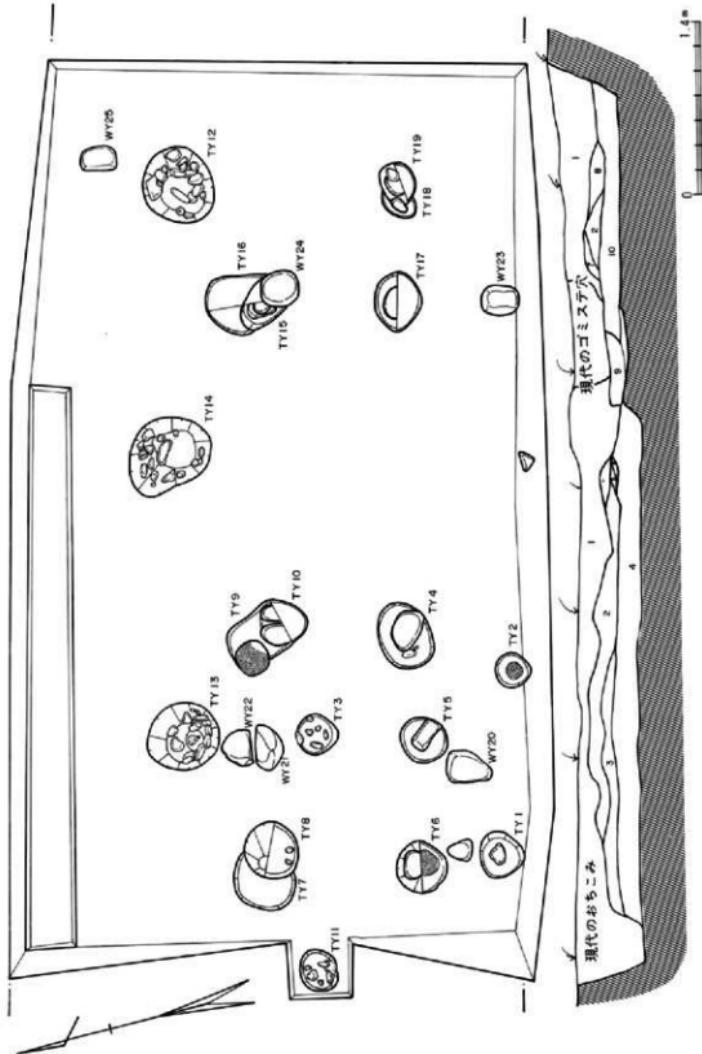
第1図 三の丸遺跡第1次調査位置図 2,500分の1



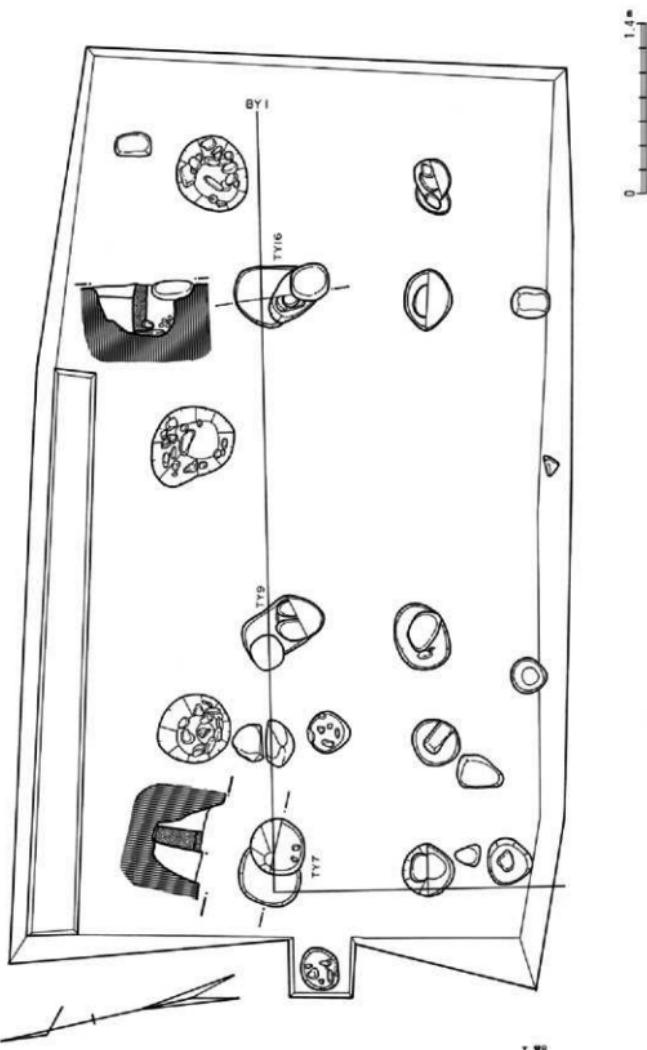
享保10年(1725) 岩瀬小左門 作

—第1次調査地点

第2図 米沢城下絵図

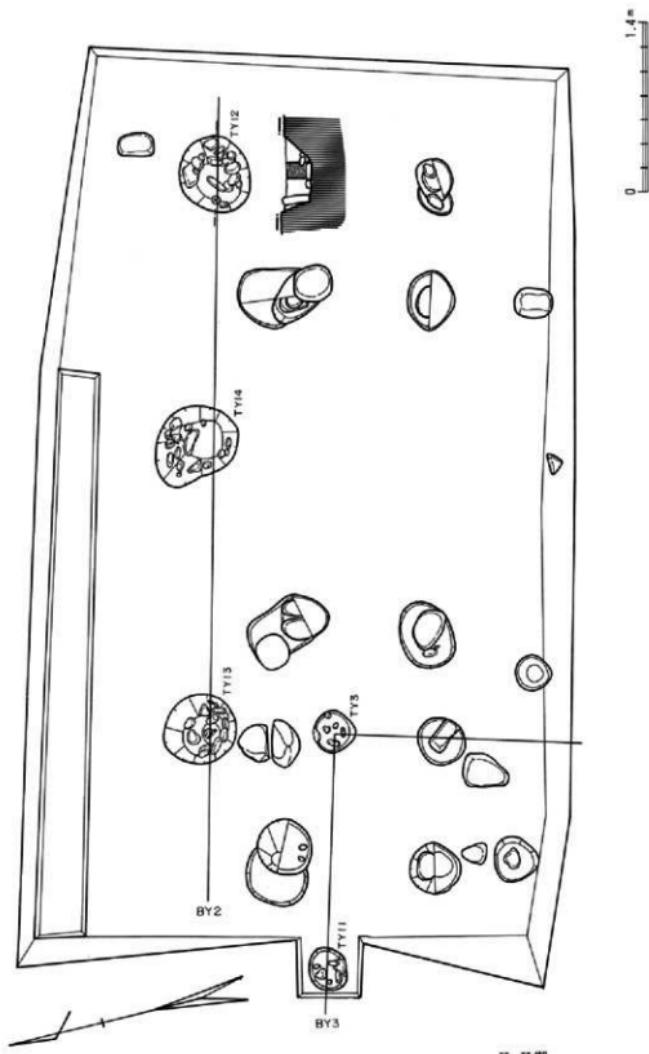


第3図 三の丸遺跡第1次調査造構平面全体図

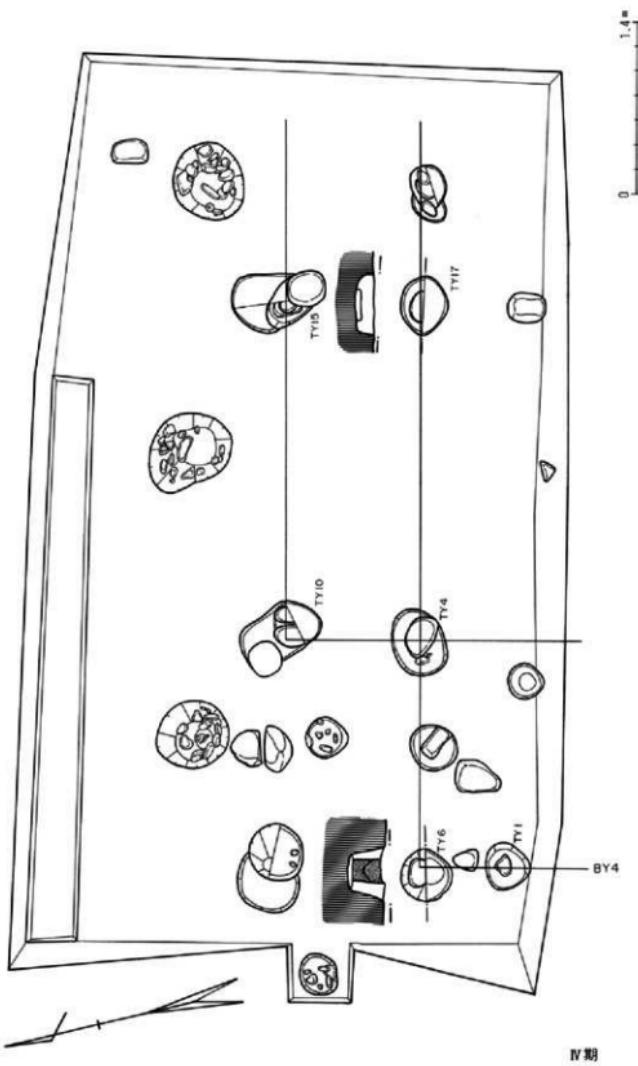


I期

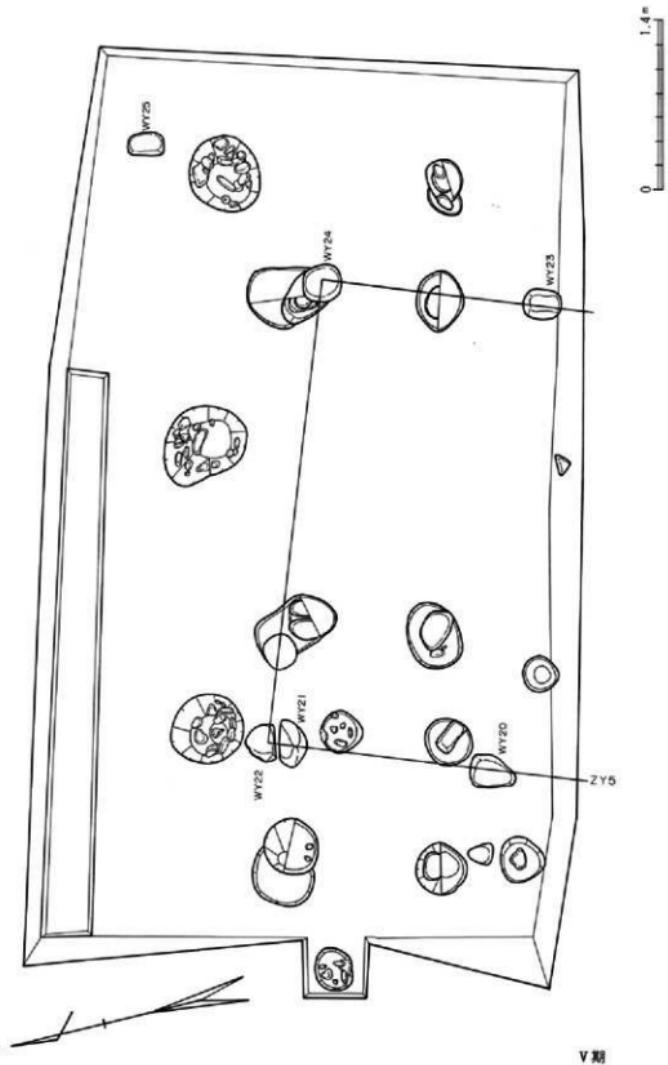
第4図 三の丸遺跡第1次調査BY 1平面図 (1)



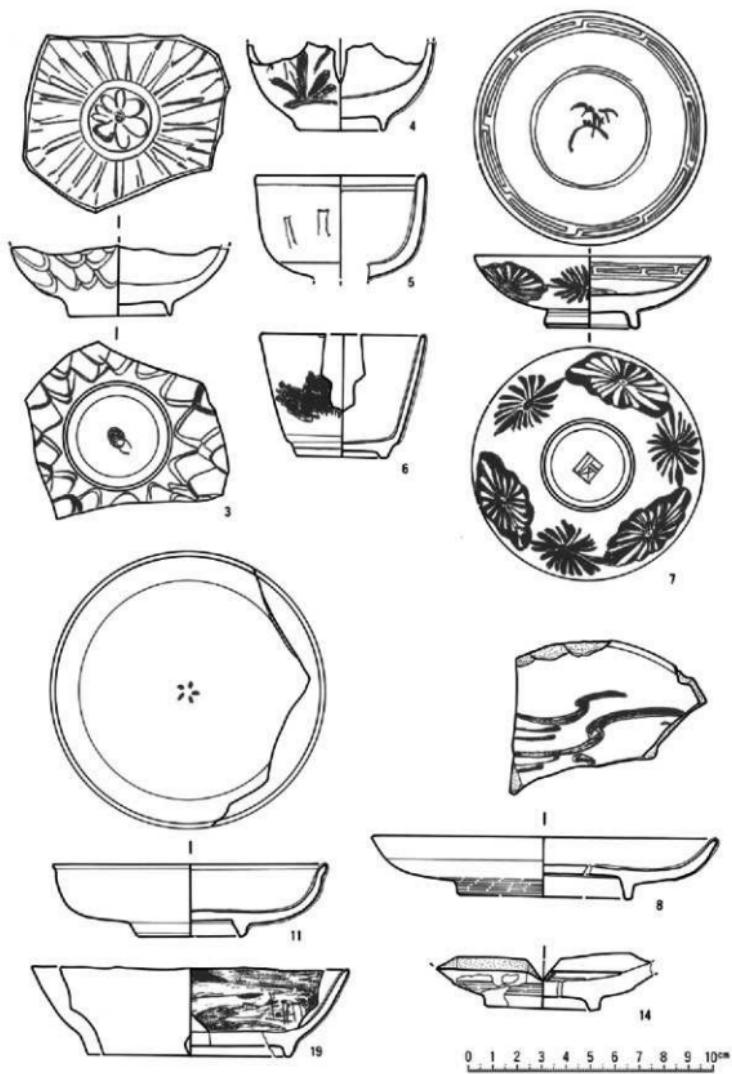
第5図 三の丸遺跡第1次調査BY 2, 3平面図(2)



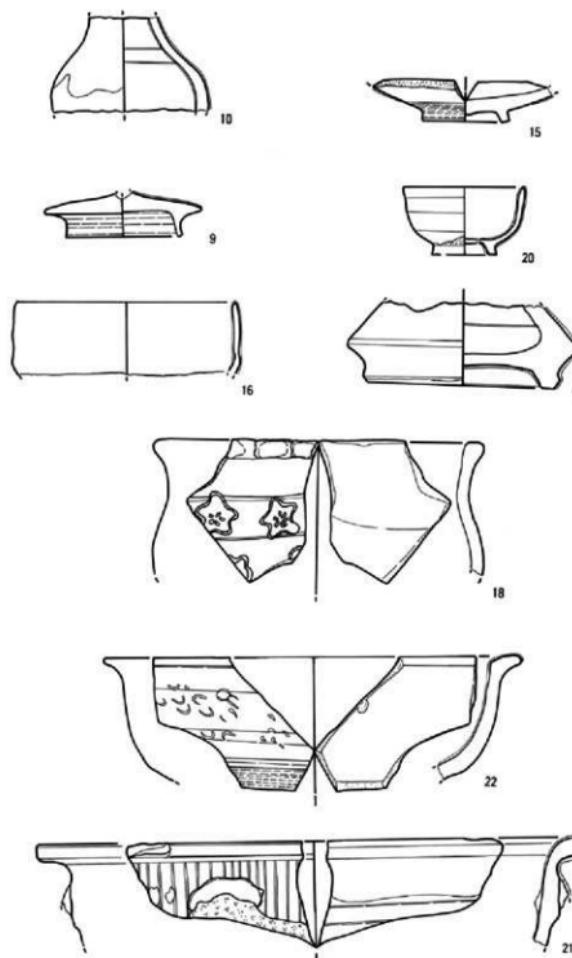
第6図 三の丸造跡第1次調査BY4, 5平面図 (3)



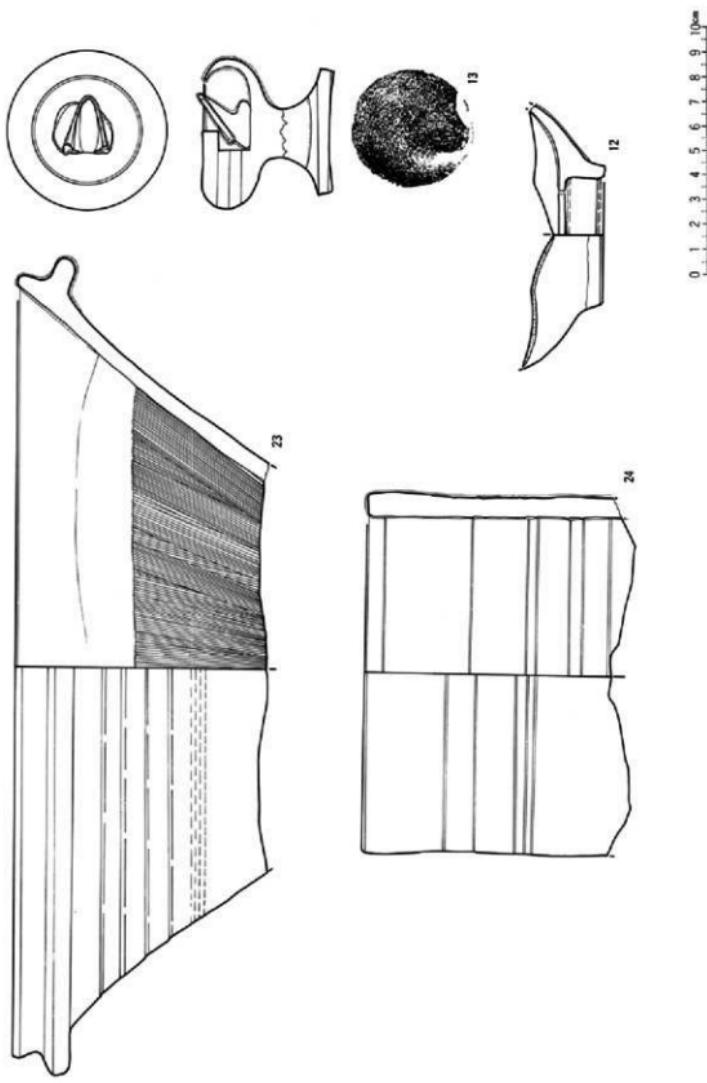
第7図 三の丸遺跡第1次調査ZY平面図(4)



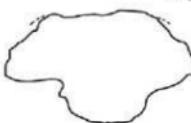
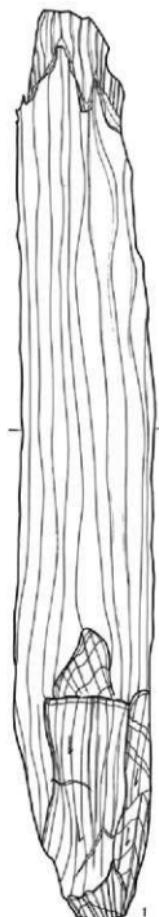
第8図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図



第9図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図



第10図 三の丸遺跡第1次調査出土陶磁器実測図



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10cm

第11図 三の丸遺跡第1次調査出土木器実測図

生蓮寺遺跡第1次調査の発掘

I 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置〔第12図参照〕

遺跡は米沢市西南部の館山1丁目1の092番地他に所在する。米沢駅前から東西に延びる国道121号線を西へ直線で約5kmの場所で、米沢市街地を取り巻く様にして東南西に走る米坂線の踏切を越え大樽橋を渡る手前で直角に曲がる県道鳥川西米沢停車場線がある。この県道は館山三下目にある米沢市立第三中学校付近でカーブするもので登り坂となる。大型車が通れるのはこの県道だけであるが他に幅のせまい三本の道路が国道121号線から県道に通じ、東の方から1の坂二の坂、三の坂、四の坂と地元では呼ばれ、この中で県道は二の坂にあたる。坂を登りきった所で県道は西に直角に曲がって、小野川温泉に連絡している。県道が西に曲がる場所は変形の十字路になってしまっており、直進すれば山形県営御成山シャンツェ、そして東に進むと生蓮寺で通き止まりとなる。遺跡はこの寺の敷地も含むことから「生蓮寺遺跡」と1984年に命名された。

(2) 遺跡周辺の地形

遺跡は笠野山標高660m、愛宕山標高559m、羽山標高534mがある笠野山丘陵の最西端部に位置し大樽川及び松川によって形成された段丘上にある。段丘上の標高は276~294mあり、段丘下に北東に広がる沖積層との比高差は約11mを有す。沖積層の大半は現在リンゴ園として利用されて「館山リンゴ」として県内外に知られる美味のリンゴ産地でもある。沖積層は表面は微砂質の褐色土で約0.5~1m位でその下には大形状の礫が堆積している。

松川流域の遺跡群はかつての笠野山丘陵の山麓を西流していた松川によって形成された河岸段丘上に沿って分布しており、最上流域の淡川遺跡から本遺跡を含めた80箇所が確認され、この数字は同じ河川に集中する梓川流域の遺跡群163箇所に次ぐものである。遺跡の面積は南北220m、東西120m（約2,600m²）をもち、西端のNo150と隣接しているが地形等から判断して両遺跡は包括されるものと考えたい。

(3) 周辺の遺跡と歴史的環境

第12図に示した範囲だけでも9カ所の遺跡群が確認されている。年代的にはNo.99の城山館を除き縄文時代で占められる。他にもこの周辺は米沢里人譜によると大永元年（1521）伊達稙宗によって越後に通じる新道（現在の国道121号線）を開拓した事から西側の要所とされ、No.99も深い関係を有するものであろう。また伊達系団、奥羽永慶軍記。治家記録には天正12年（1584）に伊達輝宗、館山城に引退し、男政宗繼いだ。伊達氏第十七世、時に18、政宗米沢城に居る。とあり、館山周辺のいずれかに館があったことを物語っている。

縄文時代の遺跡からは農作業の際などに偶然発見された遺物が多数発見されている。それらの遺物の大半は剥片類である。少量の土器片から観察するとNo.149は中期・後期、No.150は前期・後期、No.151は不明、No.152は晩期の年代があたえられている。

II 調査の経過

昭和61年（1985）4月18日、館山1丁目地内の新築に係わる建築申請が市建築課に提出され、現地調査の結果、遺跡内であることから米沢市教育委員会は試掘調査を、5月14日に実施したところ、縄文時代前期初頭の遺物が確認されるとともに遺構検出も建設予定地内の大部分に密集しているものと判断、正式な発掘調査の必要性を認識した。そして地主の石井氏を初め相田建設㈱、米沢市教育委員会との間で協議の上、建設予定地に相当する6m×8mの範囲で5月15日から同22日の日程で発掘調査を実施するに至った。

調査はすべて人力でおこない、表土剥離から開始1日で終了、次に面整理と進めこの段階で多数の縄文土器を検出した。これはこの場所が宅地を造成する際に整地していたことから搅乱層になつてゐるため（石井氏宅はこの地の家をとりこわして新築なされた）ある。我々は遺物密集している場所に竪穴式住居跡があるものと期待して調査を進行させたがピットを検出しただけにとどまつた。調査の進行とともに多数の柱穴群が確認され、縄文・中世・近世が複合している遺跡であることが判明してきた。そこで重複関係を吟味しながら発掘を続行、5月20日までに遺構の掘り下げを完了する。遺物は縄文土器の他に石器・陶磁器なども出土し、中でも戸長里窯の製品が出土した時は感嘆した。5月21日に遺構平面図を作成、5月22日に現地説明を実施し生蓮寺遺跡第1次調査を終了した。

III 検出された遺構

今回の第1次調査区からは土壌（D Y）11基、溝状遺構（K Y）4基、ピット（D Y）86基、不明遺構（F Y）2基の計103基の遺構群が検出された。これらの遺構群は出土した遺物及び重複関係、遺構内の堆積状況の吟味により縄文時代前期初頭、中世（桃山時代）、近世（江戸中期頃）に位置づけられる。年代別に区別して各遺構群の性格について述べたい。

（1）縄文時代の遺構

第13図の東側周辺に分布するピット群でP Y 4～15, 35, 49, 54, 58, 59, 64～66, 90, D Y 3が認められる。いずれも地山の明黄褐土を掘り込んで構築された遺構群であり、覆土は黒土、黒褐色土が自然堆積した状況を呈す。縄文時代の遺物が集中している地点と一致する事から判断して、竪穴住居跡を構成していた柱穴群と理解したい。竪穴住居跡の壁や炉は後世の整地や遺構構築の際に破壊されたものと思われる。D Y 3は南北に長軸を有し2.5m幅は1.15m、深さ45cmを測る。底面より第13図に示した土器が出土している。形態よりゴミステ穴と考えたい。

（2）中世から近世の遺構

ピット群（柱穴）と土壌で占められる。ピット群はプランや内部の形態から二者に大別されよう。まずAグループとしてP Y 33, 42, 51, 57, 61, 97のように円形や橢円形形状を有し大きさが平均50cmを測るもの。BグループとしてP Y 23, 29, 31のように小径で20～30cmの柱穴群。土壤

はD Y 1, 67, 68, 80, 70, 82, 103, O Y 2がある。これらの遺構群の覆土は明赤褐色である。柱穴群としたA・B両グループとも明確な建物跡の配置関係を把握するのは今回の調査では困難であった。

Aグループの柱穴は深さが平均で30~40cmを有し、Bグループと比較して深く、また根固の礎を配置している。米沢城三の丸遺跡や上浅川遺跡第1次調査区に類例があり、中世に位置づけられ、本遺跡で言えば戸長里窯で焼かれた陶器の年代に位置づけたい。Bグループは深さが10から20cmと比較的浅く、不整形形状の円形を有するものが多い。

土壇は不整形や長円形のプランを有し、D Y 1は複雑に掘りこまれている。現況で長径1.75m、幅1.4m、深さ31cm、O Y 2は東西に長軸を有す長円形を呈し、長径1.34m、幅48cm、深さは45cm、D Y 68は不整の長円形を有し、O Y 2と同様な方向に位置し、長径1.35m、幅48cm、深さ48cmとO Y 2と同様な規模を有す。D Y 80も前者の両土壇と同一規模である。D Y 82はD Y 68、O Y 2、D Y 80よりはやや小規模であるが深さ、長軸方向は同一方向である。D Y 103も前述した土壇群と同一方向に構築されているが、南側壁面をK Y 69に削り取られ、深さ17cmと浅い。D Y 70はD Y 102を切って構築され南北方向に長軸を有し96cm、幅50cm、深さは19cmある。D Y 102はD Y 1と同じ方向に延び幅75cm、深さは24cmと浅い。これらの土壇群からは繩文時代の土器片・石器片・礎器・陶器などが出土しているが繩文時代の遺物については流れこんだものである。

性格はO Y 2とした土壇については人工堆積を呈すが他は自然堆積である。D Y 80、92は掘立建物の柱穴が重複した形態で、結果的に長円形を有す形状になったものと考えている。これら3基を除く土壇群はゴミステ穴としておく。他にこの時期に位置する遺構として溝状遺構のK Y 43、47、48、69、94が認められる。小規模な43、47、48は幅が20~35cm、深さは10cmと浅い特徴を持つ。いずれも柱穴群と重複関係にあり全容は不明と言わざるをえない。69は調査区の西から東に延び中央で94と交差し、両者とも最大幅は1.94mを有す大形の溝状遺構である。深さは10~15cmと浅く形状も不整形を呈す。底面の状況は水が大量に流れた痕跡は認められない。年代的には大半の遺構群がこの溝状遺構によって削り取られている事から判断して近世の遺構といえよう。

さらに不明遺構としてF Y 91、98がある。両者とも一部分だけ完掘した。91はP Y 87~88、100、101のピット群が重複、プランも不整形であり、風倒木壙か抜痕跡と考えたい。また上記のピット群はその際に木の根により生じたのかもしれない。98は竪穴状を有す形状で深さは19cmを測る。D Y 68、P Y 61、96などの重複関係から中世以前の年代があたえられよう。性格は全容が完掘できなかったために不明としておく。

IV 検出された遺物

今回の調査区からの出土遺物は土器片110点、石器125点、石製品2点、礎器4点、陶器類18点、戸長里窯製品6点、かんざし1点、砥石1点、硯1点がある。遺物は第II層、遺構からの検

出である。これらの遺物について拓影図・実測図・図版が必要と認識されたものに対し図面を作成した。土器は縄文前期初頭に位置づけられるが1点だけ縄文後期中葉がある。

石器は完成石器1点、他は剝片類で占められ、フレーク、チップの剝片類が主体をなす。完成石器はⅦ群b³類に分類したエンド・スクレーパーである。剝片類はa形態(縦形)、b形態(横形)に大別でき、a形態は66点、b形態は54点、不明は4点であった。礫器は凹石3点、面取石1点が出土している。陶磁器類はすべて破片で占められる器面の観察より近世といえる。また砥石・硯も同時期の遺物である。下記に石器・礫器・石製品・土器・戸長里窯製品・陶磁器・かんざし・砥石・硯の順で説明にしたい。

(1) 石 器〔第17図～20図、第12、13図版、第3表〕

出土した石器125点の中で40点について実測図を作図、第3表に形態分類計測表を作成した。形態別に見るとa¹類8点、a²類3点、a³類3点、a⁴類17点、a⁶類1点、a⁷類3点、a⁸類4点、a⁹類8点、a¹⁰類12点、a¹¹類1点、b¹類4点、b²類2点、b³類11点、b⁴類4点、b⁵類2点、b⁶類10点、b⁷類14点、b⁸類7点であった。出土点については第13表を参照願う。次に各形態別の石器についての説明に入る。

a. Ⅶ群石器〔第17図59〕

調査区北側より1点出土している。Ⅶ群b³類に細別した石器であり、縦形剝片を素材に用い片面調整で整形し、刃部は丸味を帯び基部は尖状を呈す。縁辺には使用痕が認められ、縦断面形態で示すように作業縁辺は直角に近い。この形態、特に刃部を直角的に整形する石器は縄文時代の各時期に存在するが基部が尖状を有するのがこの石器の特徴であり、桑山遺跡群No.5遺跡の縄文早期に多くみられることから、今回出土の石器も縄文前期から縄文後期初頭に位置づけたい。

b. 剥片の細類

出土した剝片は前述したように、a類、b類に大別、さらにa類はa¹～a¹¹類の11形態、b類はb¹～b⁸類の8形態に細類を加えた。以下、これらの剝片について述べたい。

• a¹類形態剝片〔第17図60、他7点〕

打面が平坦で、先端部が丸味を有すものである。作図した60はa面縁辺に刃済し整形し、作業縁辺としている。基部の下半部が欠損しているのが多く認められた。

• a²類形態剝片〔第17図61、第18図71、他1点〕

打面が狭く、先端にかけて広がる二等辺三角形状を有す。a³、a⁶、a⁸、a¹¹類とともに出土量の少ない剝片形態である。いずれの剝片も二次調整は認められない。

• a³類形態剝片〔3点〕

打面が広面を有し、先端が尖る二等辺三角形を有する形態である。

• a⁴類形態剝片〔第17図62～64、66、67、第18図73、75、他10点〕

打面からどちらかに曲るものである。今回調査区からは a, b 両形態の中で最も出土量の多い剥片形態である。この形態については意図的よりも偶然性によるものと理解している。

• a⁵類形態剥片〔第17図65〕

基本的にはa²類と同様であるが、先端部で大きく丸味を有するものをa⁵とした。

• a⁷類形態剥片〔3点〕

打面、先端部の両端が尖りを有するものである。すべて二次調整は認められなかった。

• a⁸類形態剥片〔第17図68、第18図69、他2点〕

打面が平坦で大きくそのままの形狀で先端部にかけて尖りを有するものである。

• a⁹類形態剥片〔第18図70、77、他6点〕

基本的にはa⁵類と同様であるが、先端部がやや丸味を有するもので、折れ面を有するのが多い。

• a¹⁰類形態剥片〔第18図72、76、78、79、他8点〕

角の張った方形状を有するものでa⁴類に次いで出土量の多い剥片形態である。

• a¹¹類形態剥片〔1点〕

全体が丸味を有する円形状を示す。チップに多く認められる傾向を呈す。

• b¹類形態剥片〔第19図81、第20図98、他2点〕

打点面が尖り、先端部にかけて広がる正角形状を有するものである。

• b²類形態剥片〔第19図82、他1点〕

b¹類の逆で打点面が、平坦で先端部が尖りを有するものである。二次調整が若干認められる。

• b³類形態剥片〔第17図59、第19図83、第20図93、96、他7点〕

打面からどちらかに曲るもので、a⁴類とともにb類でも出土量が多い剥片形態である。

• b⁴類形態剥片〔第19図84、86、他2点〕

打点面がやや広面な台形状を有する形態である。断面が薄い剥片に多く認められる傾向を有す。

• b⁵類形態剥片〔第19図87、第20図97〕

基本的にb⁴類と同様な形態を呈するが、バルブ付近で曲するものである。出土量は少ない。

• b⁶類形態剥片〔第19図85、88、他8点〕

打点面が平坦で先端部が丸味を有し、半円形状なもの、b³類、b⁷類、次いで出土数が多い。

• b⁷類形態剥片〔第20図89~92、94、他9点〕

角の張る方形状で、b形態剥片では最も出土数が多い剥片形態である。

• b⁸類形態剥片〔第19図80、他6点〕

打点面が丸味をなし、先端部にかけて平坦なb⁶類の逆形態を有する剥片形態である。

c. 積 錠〔第21図99~102、第13図版〕

99, 101, 102は凹石であり、99, 101は両面に凹部が観察される。101 b面の1部に磨面が認め

られる。102は、凹が「V」字状を呈し、クルミをのせるとちょうどよい形状になっている。

d. 石製品〔第21図103, 104, 第13図版〕

103は周辺の縁辺から敲打によって正方形状に整形された石製品で、両面に自然面を有す。縁辺には使用痕は認められない。104は円形状を呈す小碟を素材に用い、縁辺の約半分が研磨されている。両者とも装飾品の未完成品であろう。

(2) 出土土器

繩文前期初頭の土器群を中心に中世陶器、近世陶器等22点が検出されている。ここでは年代順に簡単に説明を加える。

A群土器〔第15図1～22, 第16図23～39〕

胎土に植物性の纖維を多量に含む土器群であり、97点が認められた。すべて破片によるものが大半であり、口縁部がゆるやかに外反し、胴部がわずかにふくらむ深鉢形を有するものが多い。文様表出技法と文様構成から次の5類に細別される。

• a類〔第15図1～18〕

ループ文を主体にしたグループを一括した。1～3は口縁部片でループ文を横位に押圧回転したもので、2は不整撚り、3は口縁部にヘラ状工具によるキザミと鋸齒状の突起を有している。6～11・14・15は三角形状の無文帯を置き、ループ文で平行と斜位に押圧して文様を構成する。中でも9はループ文と無文帯を沈線文で区画している。5は基本的には前者のグループと同じであるが、ループ文を菱形状に配するものであり、これらは胴部から口縁部付近の所謂「口縁部文帯」を飾る文様帶と考えられる。4・6・7・12・13は横走するループ文を施した胴部片である。同じループ文でも17は横位にループ原体を連続押圧したもの。16・18は撚りのあまい原体もしくは不整撚りの原体を回転したものと考えられる。

• b類〔第15図19～21〕

斜纏文のグループを一括した。19・20はL { R, 21はR { Lとなる。

• c類〔第16図23～28〕

撚糸圧痕文を有するグループを一括した。撚糸圧痕文を有する仲間には次の3種類がある。平行撚糸圧痕を配し、「クサビ」状の突刺文を横位に連続されたもの23。二条の平行もしくは斜位の撚糸圧痕内に棒状工具等による「キザミ」目を加えたもの25～27。状圧痕文を配した外面に「クサビ」状突刺文を工夫に施文するもの24。

• d類〔第15図22, 第16図29, 31, 32, 34, 35, 39〕

羽状纏文を主体としたグループを一括した。本類に属する纏文原体のすべてが二段の前々多条を有しており、22がLR・RLの6本多条、29が4本、31・32、34・35・39は同一個体で3本の原体を用いている。

• e 類 [第16図30, 33, 36, 37, 38]

半截竹管や棒状工具、ヘラ状工具を用いて施文した土器群を一括した。30を除く他は底面から底辺部にかけて施文するが、30は口縁部文様帶として平行と菱形状に構成している。

B群土器 [第16図40]

縄文後期中葉に位置するもので1点検出された。平行状線内に縄文R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \end{array} \right.$ を充填したものであり斜に状線が一部残っていることから下方に入組文を展開するのかも知れない。

C群土器 [第16図41, 42, 第十図版43, 44~46]

戸長里窯で焼かれた製品である。圓化した41は口径18.5cm、高さ7.2cmの原鉢、42は一見、擂鉢的であるが、鉢の一種であろう。他に甕の破片1点と原鉢の破片2点が検出している。詳しくは戸長里窯跡調査報告書（まんぎり会・1986年発行）を参照願いたい。

D群土器 [第十図版46~54]

近世陶器6点（46~49, 53, 54）と中国製陶器50~52の3点がある。いずれも破片であり、実測図は割愛した。これらの遺物は表土および、擾乱層の出土であった。47, 49, 54は底部破片で47は高台の切り離し特徴から唐津系と思われる。49は明治以後の製品でドイツ呉須と呼ばれ染付皿だ。その他は不明である。中国製陶器は染付の文様や呉須の色から想定したものであるが、類似品も日本で生産される場合もあり断定はできない。

(3) そ の 他

かんざし [第十図版57]

調査区北東地点より1点出土している。長さ14.2cmの銅製で先端部には「みみかき」ができるよう整形してある。砥石・硯・陶磁器等と同様な年代に考えられている。

砥 石 [第十図版55]

調査区D Y 1上面より欠損面を有す砥石が1点出土している。素材は石英粗面岩を用い四面が作業面として使用されている。欠損面は使用時の中央部と理解され、使用時は約11cmであろう。中世~近世に多く認められる形態であり、本遺跡出土の砥石もこの年代に位置づけられよう。

硯 [第十図版56]

調査区北東隅の擾乱層より1点出土している。黒灰色の粘板岩を素材に用い現形で幅5.5cm厚さ1cmを測る。長さは不明であるが12cm~13cmを呈すものと推測したい。使用面となる凹面には使用による若干の凹面が認められスミが付着している。年代は擾乱層の出土である事からはっきりとはいえないが形態から想定して近世に位置づけたい。

Ⅳ ま と め

今回の調査は宅地造成と言ふ小範囲内での発掘調査であるため、本遺跡のもつ性格や明瞭な遺構の存在は残念ながら判明しなかったが、柱穴跡・縄文前期・同後期・戸長里窯の遺物の発見などから、米沢市内でも重要な遺跡である認識を得た。米沢市内の発掘調査は近年、めざましい数で行なわれているが、米沢東部（万世・上郷地区）に限定していることもある、特に米沢西部に関しては無味であった。この度、生蓮寺遺跡の発掘調査を実施するに至っては、種々な面で重要な意味を呈する。それらを遺物と遺構の両面で考えてみよう。

まず、縄文前期初頭の土器群は鬼面川と松川の段丘形式を考えた場合、少なくとも生蓮寺遺跡付近一帯の地形は縄文前期には安定していた事を物語るものである。また a 類土器の文様構成は山上地区の松原遺跡と同様に関東地方の関山式の特徴を有するもので、同じく c 類土器に関しても一段階古い花積下層式の影響を有する。しかし、松原遺跡、八幡原 B 遺跡等の発掘調査では同じ層内から両者とも認められており、そして今回の生蓮寺遺跡等から考えると少なくとも米沢市内では共存する可能性も予想される。ただし、ループ文 a 類は小野川 b 遺跡、法将寺遺跡、横山 a 遺跡においては c 類土器が 1 点も認められない事実もあり、一概には断定されない部分もいなぬ。d 類の太状の節をもつ羽状縄文、c 類の蕨状圧痕文の特徴から言うと八幡原 B 遺跡出土の土器に共通している。

次に C 群土器の存在を上げなければならない。本群土器はすでに述べている様に戸長里窯で生産した製品の一部と匣鉢を転用して器として使用されている。戸長里窯は昭和60年8月1日～同年8月8日に亘って、米沢市内の考古学研究グループまんぎり会（会長 手塚 孝）が発掘調査を実施したものであり、調査の結果主軸長17.65mを有する半地下式の登り窯で、出土した遺物から15世紀～16世紀の美濃（瀬戸系）の流れを汲む陶器窯であることが判明した。この種の窯は東北地方はもとより北関東以北からも発見されていない。戸長里窯で焼かれた製品は摺鉢・小皿など日常雑器が大半を示すが、茶碗・茶入・水指・香炉・土風炉と茶道に関する遺物も比較的多く検出している。まんぎり会はこれらを分析し、歴史的背景等も吟味し、米沢領主伊達政宗に密接な係わりを有する窯と推測した。

そんな折、生蓮寺遺跡から戸長里窯の陶器が出土した事は重要な意味をもつ。当地館山地区は伊達氏十六代、伊達輝宗が天正十二年に家督を政宗に譲り、隠居館を建てた所として知られる。現実的には今の所、その館の所在は明確でないが、館山地区に存在することは言うまでもない。戸長里窯自身も伊達政宗が築窯したと言う明確な裏付けが残っている訳でもなく、輝宗の隠居所との係わりも含め、今後の課題としておこう。さて遺構であるが、上部からの攪乱が著しく、今一であったが、明らかに掘立建物跡の柱穴が存在する。全体的な配置は部分調査の範囲では困難であった。

第5表 生蓮寺遺跡第1次調査出土石器、剝片、器部分類表

単位 cm. g

通し番号	遺物名	探査番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	測定調整	備考
1	106	第17回60	第1太渓北区	II層	12.5	4.8	1.6	97	頁岩	a ¹	Nb+R ⁴⁻⁹ I-IIb+R ¹⁻³	自然面あり
2	90		"	"	8.4	3.1	1.5	33	"	"	IIa+R ⁷	"
3	14		"	"	2.1	1.6	0.2	1	"	"		
4	118		"	"	5.5	2.6	0.6	10	"	a ^{1-1A}		折れ面あり
5	12		"	"	3.2	1.6	0.5	2	"	"		"
6	24		"	"	2.3	1.3	0.5	3	"	a ^{1-1B}	IIab+R ⁴⁻⁸	"
7	69		"	"	2.7	1.7	0.5	2	"	a ^{1-1C}		
8	91		"	"	3.6	1.1	0.2	2	"	"		折れ面あり
9		第17回61	D Y 3		3.3	1.9	0.2	2	"	a ²	Nb+R ⁵⁻⁶	発成によるハジケ面あり
10		第18回71	第1太渓北区	II層	3.9	2.5	0.3	4	"	"	Ia-Nb+R ⁴⁻⁸ Ib+R ⁹	
11			"	"	3.5	3.5	0.4	12	"	a ^{2-1C}	Nb+R ⁹	折れ面あり
12	85		"	"	2.0	1.0	0.2	1	"	a ²		
13	92		"	"	2.4	1.4	0.3	1	"	a ^{2-1A}		折れ面あり
14	79		"	"	4.5	1.8	1.0	8	"	a ^{2-1C}	Ia-b+R ⁷	自然面あり
15	83	第17回62	"	"	5.6	2.8	0.3	5	"	a ⁴	Nb+R ⁷⁻⁸	
16		第17回63	"	"	6.3	2.8	1.1	20	"	"	Nb+R ⁸⁻⁹	発成、自然面あり
17		第17回64	"	"	6.3	2.6	0.9	15	"	"		b面は自然面
18		第17回66	D Y 3		4.7	3.2	0.6	11	"	"	Nb+R ⁷⁻⁸	
19		第17回67	第1北渓北区	II層	4.2	3.1	0.7	8	"	"	Nb+R ⁶	
20	44	第18回73	"	"	6.5	5.0	1.9	60	"	"	Ib+R ⁷⁻⁹	自然面あり
21	19	第18回75	"	"	4.9	3.2	1.0	15	"	"	Nb+R ¹²⁻⁹	"
22	45		"	"	5.8	4.0	0.7	20	"	"	IIIb+R ⁷	
23	64		"	"	4.6	2.8	0.9	9	"	"		
24	16		"	"	5.9	3.8	1.3	20	"	"		
25	124		"	"	3.4	2.8	0.7	6	"	"		自然面あり
26			"	"	2.6	1.6	0.4	1	"	"		
27	10		"	"	2.2	1.9	0.4	2	"	"		ハジケ面あり
28			"	"	2.2	1.7	0.7	3	"	"		自然面あり
29	12		"	"	3.0	1.7	0.3	2	"	"		
30	18		"	"	2.5	1.7	0.2	1	"	"		
31	14		"	"	1.8	1.0	0.2	1	"	"		
32	31	第17回65	"	"	3.7	2.0	0.8	5	"	a ⁶	IIa+R ¹⁻²	
33			"	"	6.1	1.8	1.3	8	"	a ⁷		
34	95		"	"	3.0	1.3	0.6	2	"	"		
35	80		"	"	2.5	1.4	0.2	1	"	"		
36	95	第17回68	"	"	5.9	4.0	0.7	12	"	a ⁸		断面あり
37	20	第18回69	"	"	7.0	4.1	1.5	48	"	"	I-N-a IIIb+R ⁸⁻⁹	自然面あり
38	13		"	"	4.2	3.1	0.9	9	"	"		
39			"	"	2.1	1.5	0.3	2	"	"		
40	22	第18回70	"	"	4.9	3.0	0.4	9	"	a ⁹	Ia+R ¹	自然面あり
41	14	第18回77	"	"	3.7	2.9	0.4	4.0	"	"	Ib+R ⁸⁻⁹	自然面あり
42			"	"	6.0	4.0	1.3	20	"	"		
43			"	"	3.0	1.7	0.2	3	"	"		
44	60		"	"	5.2	2.8	1.0	18	"	"		ハジケ面あり

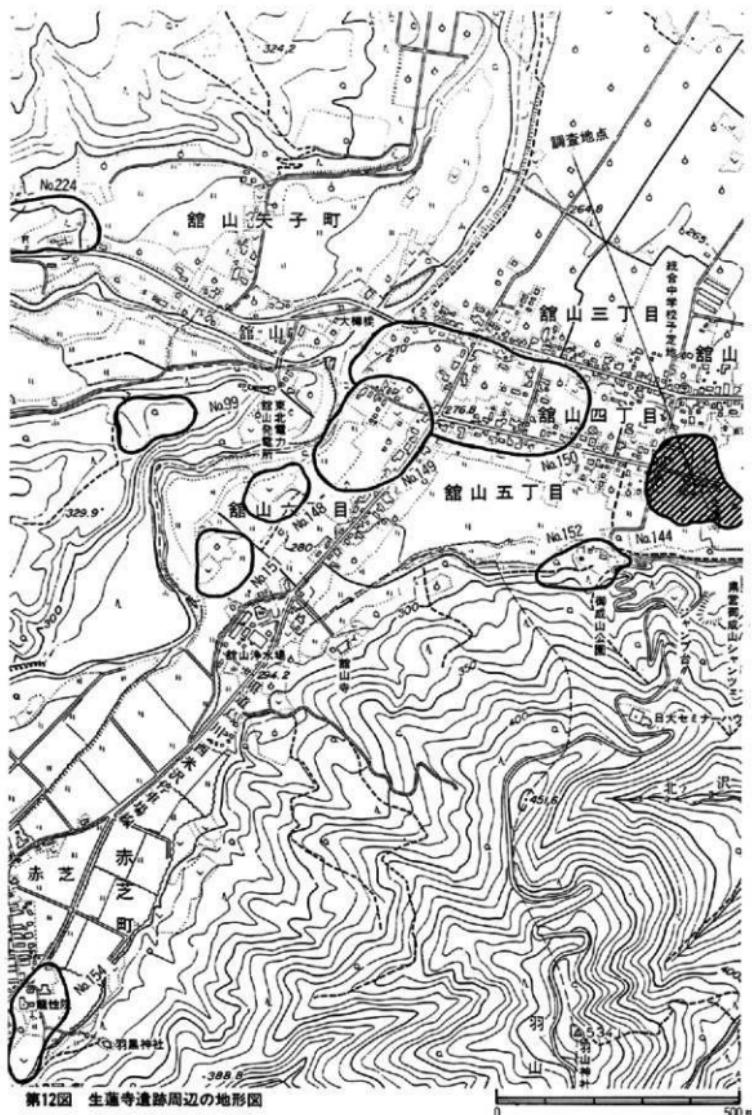
通し番	遺物名	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剖面調整	備考
45	47		第1次調査区	II層	(5.2)	6.5	1.4	61	頁岩	a ³ -1B	Ib+R ⁷⁻⁹	折れ面あり
46	114			"	(2.6)	3.1	0.6	5	"	"	"	"
47				"	(2.3)	3.1	0.6	5	"	a ³ -1C	"	"
48	126	第18番72		"	5.9	4.1	1.4	32	"	a ¹⁰	I-Ia+R ⁷⁻⁹	自然面あり
49	33	第18番76		"	(3.3)	2.9	0.7	6.0	"	"	I-Ib+R ⁴⁻⁵	折れ面あり
50		第18番78		"	3.3	2.9	0.4	5.0	"	"	III-Nb+R ⁸⁻⁹	自然面あり
51	115	第18番79		"	6.7	5.0	1.5	49	"	"	Nb+R ⁷⁻⁹	"
52	53			"	4.7	3.0	1.0	15	"	"	"	"
53	107			"	2.9	1.6	0.2	3	"	"	"	"
54				"	4.7	3.8	1.1	18	"	"	"	"
55	121			"	2.8	2.7	0.8	6	"	"	"	"
56				"	2.8	2.1	0.2	3	"	"	"	"
57	46			"	4.8	2.7	0.6	8	"	a ¹⁰ -1A	折れ面あり	"
58				"	(2.4)	2.4	0.2	2	"	"	"	"
59				"	(6.3)	4.0	2.1	56	"	a ¹⁰ -1C	Ib+R ⁹	"
60		第18番74		"	4.3	3.8	0.8	10	"	a ¹¹	Ib+R ⁹	"
61		第20番85		"	6.1	6.0	1.5	55	"	"	I~IIIa-II-Nb+R ⁷⁻⁹	自然面あり
62	69			"	3.2	3.4	0.3	5	"	"	"	"
63	62			"	4.3	3.0	0.6	8	"	"	"	ハジケ面あり
64	31			"	1.4	1.4	0.1	1	"	"	"	"
65				"	(1.2)	1.7	0.2	1	"	a ¹¹ -1C	"	"
66				"	(3.5)	4.1	1.6	23	"	aX-1B	折れ面あり	"
67	111	第19番81		"	2.6	3.6	0.2	3	"	b ¹	"	自然面とハジケあり
68	14	第20番88		"	1.3	1.5	0.3	1	"	"	"	"
69		D Y 3			2.8	5.0	1.0	13	"	"	"	"
70		第1次調査区	II層		1.5	2.0	0.2	2	"	"	"	"
71		第19番82		"	3.1	3.9	0.4	4	"	b ²	Nb+R ⁵	"
72	86			"	3.9	4.1	2.0	28	"	"	Nb+R ⁹	"
73	123	第17番59		"	9.5	4.7	1.2	59	"	b ³	I~IIIb+R ⁷⁻⁹ IIIb+R ⁴⁻⁶	使用痕あり
74		第19番83		"	7.0	7.4	1.5	48	"	"	II-IIIa-I-IIIb+R ⁷⁻⁸	"
75		第20番93		"	4.5	5.4	1.8	35	"	"	Ib+R ⁹	自然面・ハジケあり
76	26	第20番96		"	4.9	5.9	1.2	35	"	"	IIIb+R ⁷⁻⁸	自然面あり
77				"	3.0	5.9	1.5	24	"	"	"	ハジケ面あり
78				"	6.0	2.6	0.8	11	"	"	"	"
79				"	1.3	3.3	0.8	4	"	"	"	"
80	74			"	1.1	2.6	0.5	2	"	"	IIIa+R ⁷	石綿未完成品
81	59			"	1.5	2.7	0.3	2	"	"	"	"
82				"	1.4	2.8	0.3	2	"	"	IIb+R ⁴⁻⁵	"
83	65			"	(2.0)	3.5	0.7	5	"	b ³ -1A	折れ面あり	"
84		第19番84		"	3.5	4.3	0.6	8	"	b ⁴	Ib+R ⁹	折れ面あり
85		第19番86		"	(4.5)	5.2	1.9	15	"	"	"	折れ面あり
86				"	2.8	3.9	0.5	7	"	"	"	"
87				"	1.6	2.9	0.2	2	"	"	IIIb+R ⁴⁻⁵	エンド・スクレーミー
88		第19番87		"	2.8	3.0	0.8	5	"	b ⁵	Nb+R ⁸⁻⁹	自然面あり
89		第20番87		"	4.8	5.2	1.8	21	"	Ia+R ¹	"	"

通し番号	遺物名	採取番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
90	94	第19回85	第1次調査区	II層	3.7	4.0	1.0	13	頁岩	b ⁶	Mb+R ⁹ ・Mb+R ⁴	
91		第19回88	"	"	5.2	7.9	2.3	85	"	"	Mb+R ³ ・Mb+R ⁷⁻⁸ ・Mb+R ²⁻⁴	自然面あり
92		"	"	"	3.1	4.0	1.1	17	"	"	"	施理面あり
93	40	"	"	"	3.0	4.1	0.3	5	"	"	Mb+R ⁸⁻⁹	
94		"	"	"	2.8	3.5	1.3	13	"	"	"	自然面あり
95	69	D Y 3			1.0	2.4	0.5	1	"	"	Mb+R ⁸	
96		第1次調査区		II層	1.4	2.5	0.3	2	"	"	"	
97	46	"	"	"	0.9	1.7	0.1	1	"	"	"	
98		"	"	"	11.5	2.1	0.2	1	"	b ⁶ -1A		折れ面あり
99	81	"	"	"	2.0	(1.2)	0.6	2	"	b ⁶ -2D		"
100	41	第20回89	"	"	3.7	5.4	1.2	22	"	b ⁷	Mb+R ⁷⁻⁹	自然面あり
101		第20回90	"	"	2.7	4.5	1.3	11	"	"	"	"
102	54	第20回91	"	"	3.7	5.5	0.8	18	"	"	Ma-b+R ⁸⁻⁹	
103		第20回92	"	"	3.7	4.6	1.6	8	"	"	"	折れ面あり
104	59	第94	"	"	2.8	3.9	0.5	8	"	"	"	自然面あり
105		"	"	"	3.0	3.6	1.0	13	"	"	I・IIIb+R ⁹	"
106		"	"	"	5.8	7.0	2.8	125	"	"	Mb+R ⁹	"
107		"	"	"	3.4	4.3	2.0	24	"	"	"	
108	39	"	"	"	2.9	3.8	0.8	5	"	"	"	
109	102	"	"	"	1.9	2.5	0.6	3	"	"	"	
110		"	"	"	1.8	(2.0)	0.2	1	"	"	"	折れ面あり
111	42	"	"	"	3.5	4.4	0.8	15	"	"	"	
112		"	"	"	4.0	4.5	1.2	15	"	"	"	ハジケ面あり
113	86	"	"	"	4.3	(4.1)	0.7	11	"	b ⁷ -2D	Mb+R ⁷⁻⁸	節理面あり
114		第19回80	"	"	3.9	5.9	0.9	16	"	b ⁸	"	自然面あり
115	57	"	"	"	2.5	4.2	0.6	6	"	"	"	
116		"	"	"	3.5	9.5	2.0	68	"	"	"	自然面あり
117	14	"	"	"	1.3	2.0	0.3	1	"	"	"	
118		"	"	"	1.2	2.4	0.3	2	"	"	"	折れ面あり
119	121	"	"	"	1.4	1.6	0.2	1	"	"	"	
120	116	"	"	"	(1.2)	(2.5)	0.2	2	"	b ⁴ -2C	"	
121	30	"	"	"	(2.1)	3.3	1.0	8	"	X-A	I b+R ⁵	折れ面あり
122	84	"	"	"	(3.6)	(2.4)	0.7	9	"	X-2A	IIIb+R ⁷⁻⁸	使用接邊あり
123	52	"	"	"	(2.8)	4.0	1.0	15	"	X-C	"	折れ面あり
124	34	"	"	"	(1.4)	3.8	0.7	5	"	"	IIIb+R ⁷⁻⁸	"
125		"	"	"	(1.5)	3.0	0.7	3	"	"	"	"
126	BZ2	第21回104	"	"	4.3	4.3	1.1	31	粘板岩	"	"	石製品
127	110	第21回103	"	"	6.5	6.8	1.8	97	"	"	"	敲打面あり
128		第21回99	"	"	15.6	6.2	3.7	500	"	"	"	四石
129		第21回101	"	"	12.1	8.3	3.4	480	安山岩	"	"	四石、磨面あり
130		第21回100	"	"	(9.0)	6.8	4.7	430	石英 粘板岩	"	"	欠損面あり
131	72	第21回102	"	"	8.5	7.9	6.5	600	"	"	"	四石

* 石器、剝片の分類については下記の報告書を参照。

米沢市埋蔵文化財報告書第6集、1982年、米沢市教育委員会発行、33頁

同上	8集 1983年	同上	23頁～36頁
同上	13集 1984年	同上	20頁～21頁



第12図 生産寺遺跡周辺の地形図

0 500

0 1 2 3 4 mm

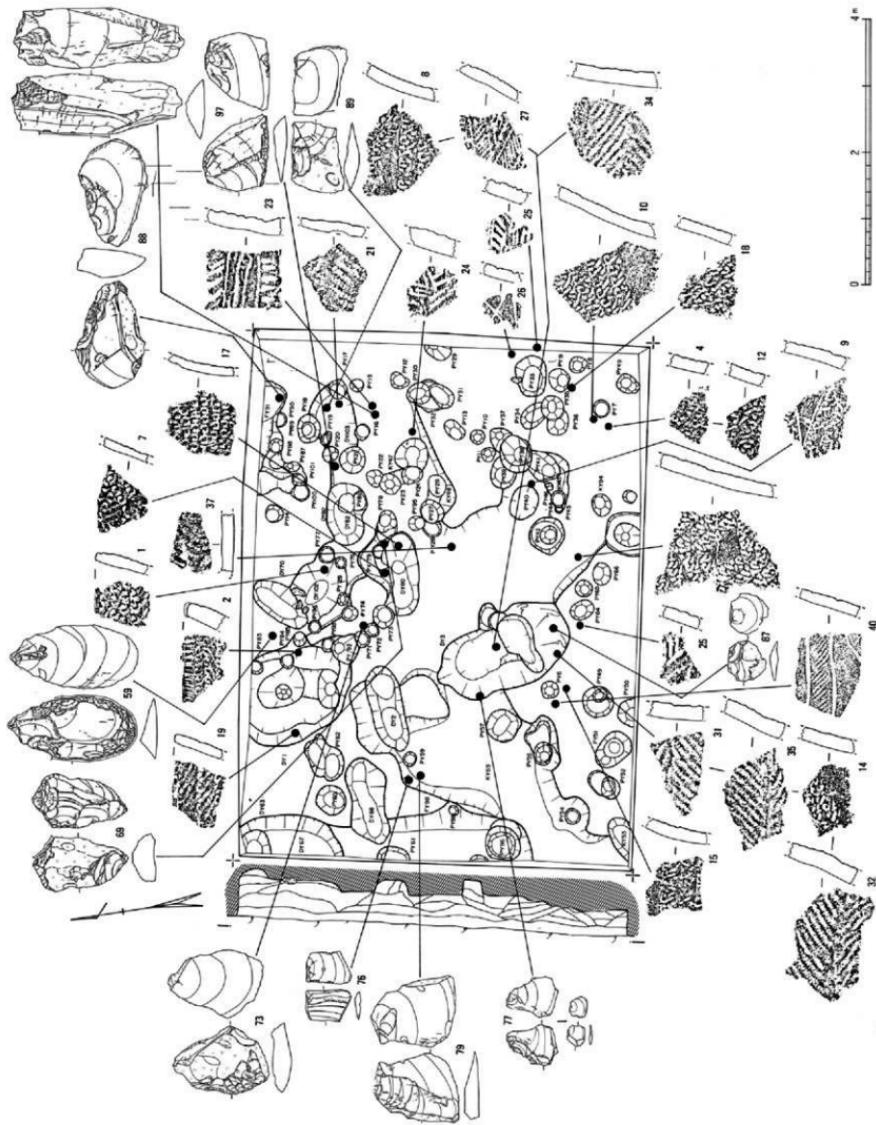
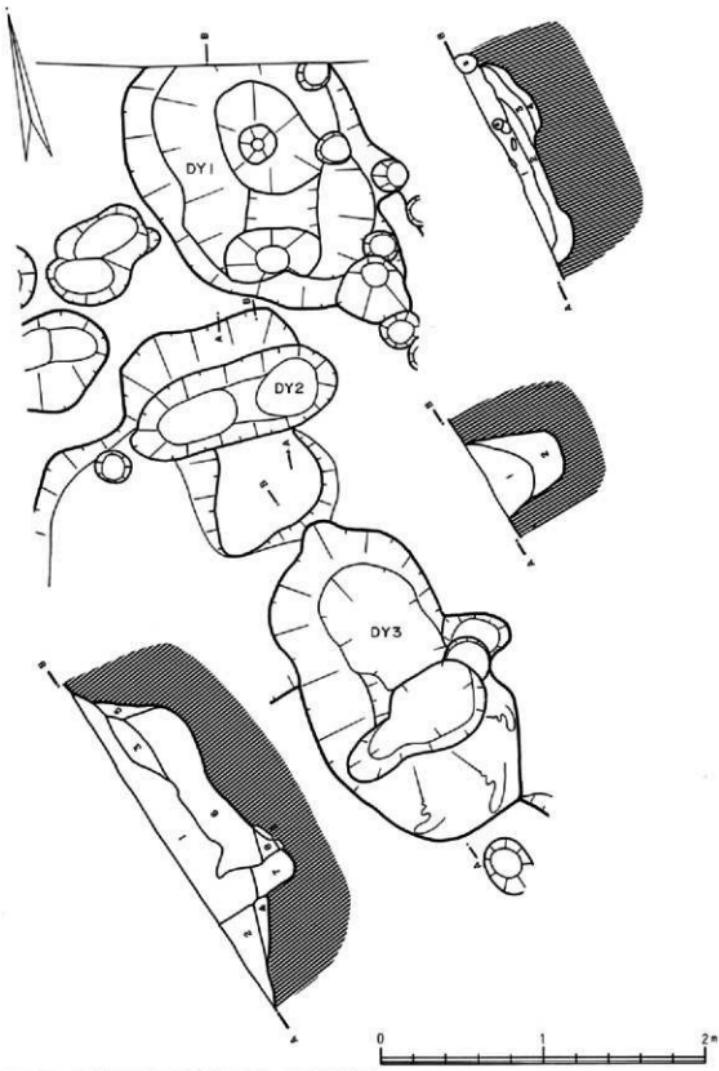
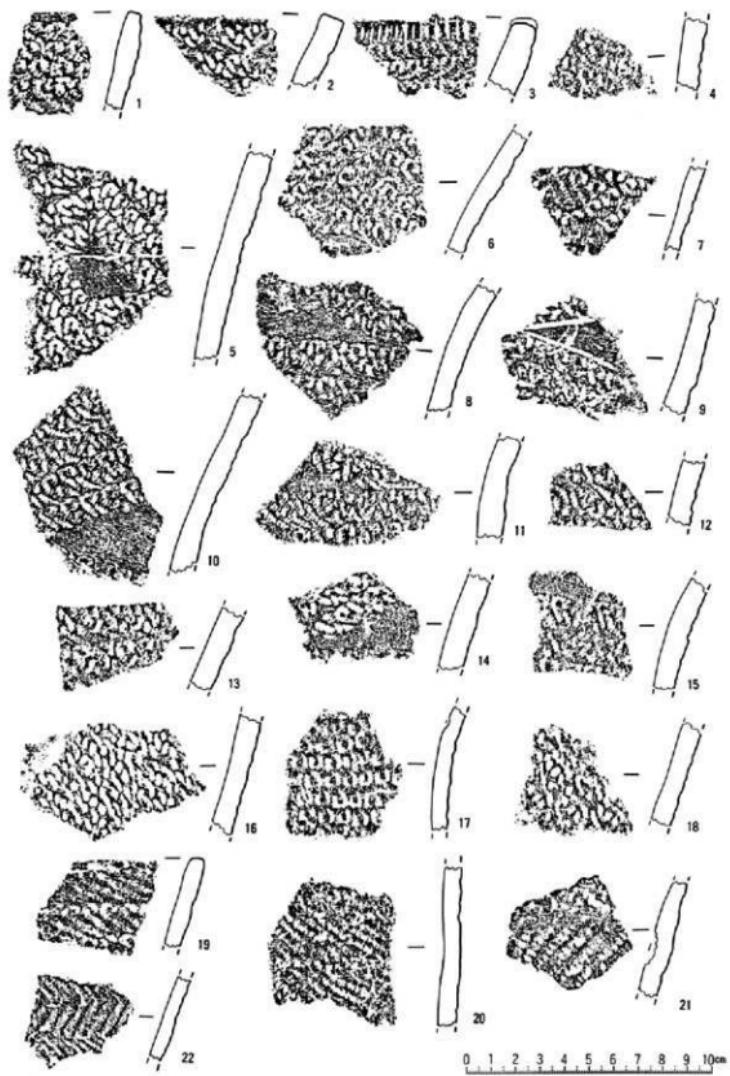


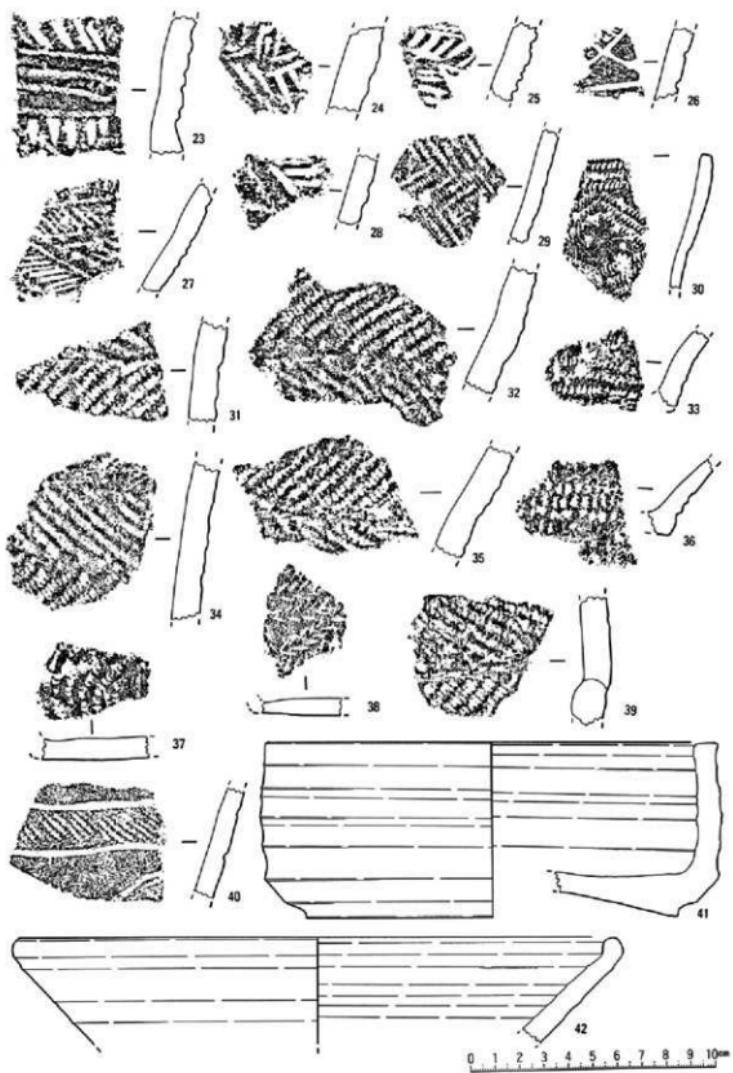
图134 生齿弓道螺第1次幼虫底板平面全图



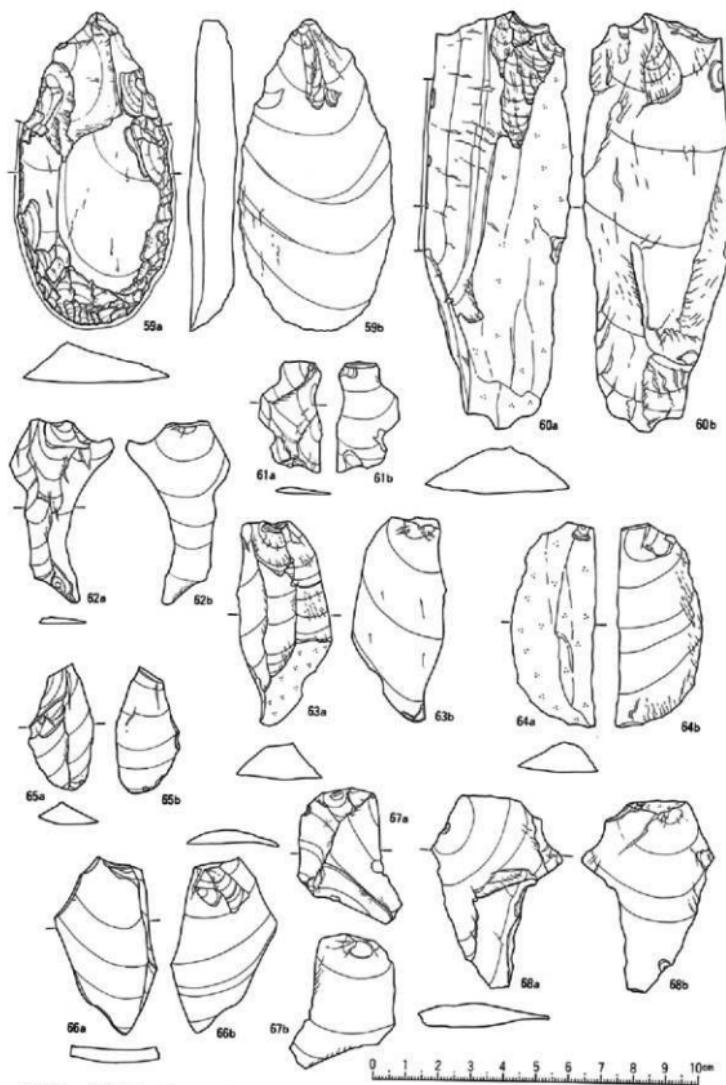
第14図 生蓮寺遺跡第1次調査DY1～DY3平面図



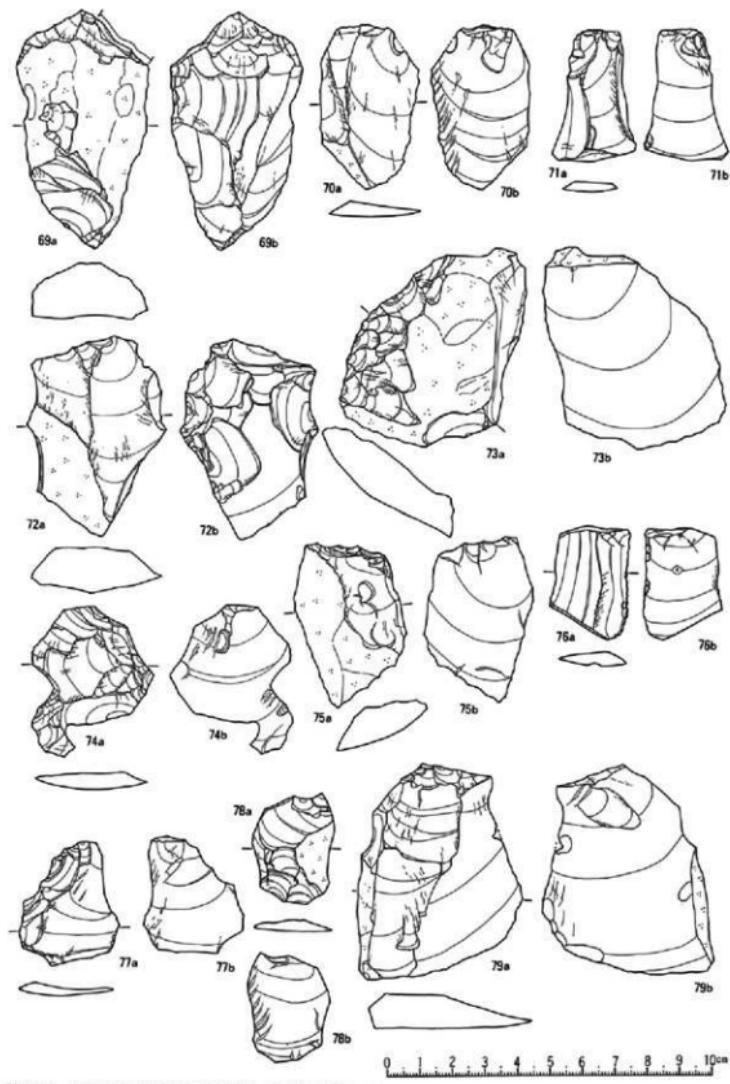
第15図 生蓮寺遺跡第1次調査出土繩文土器拓影図(1)



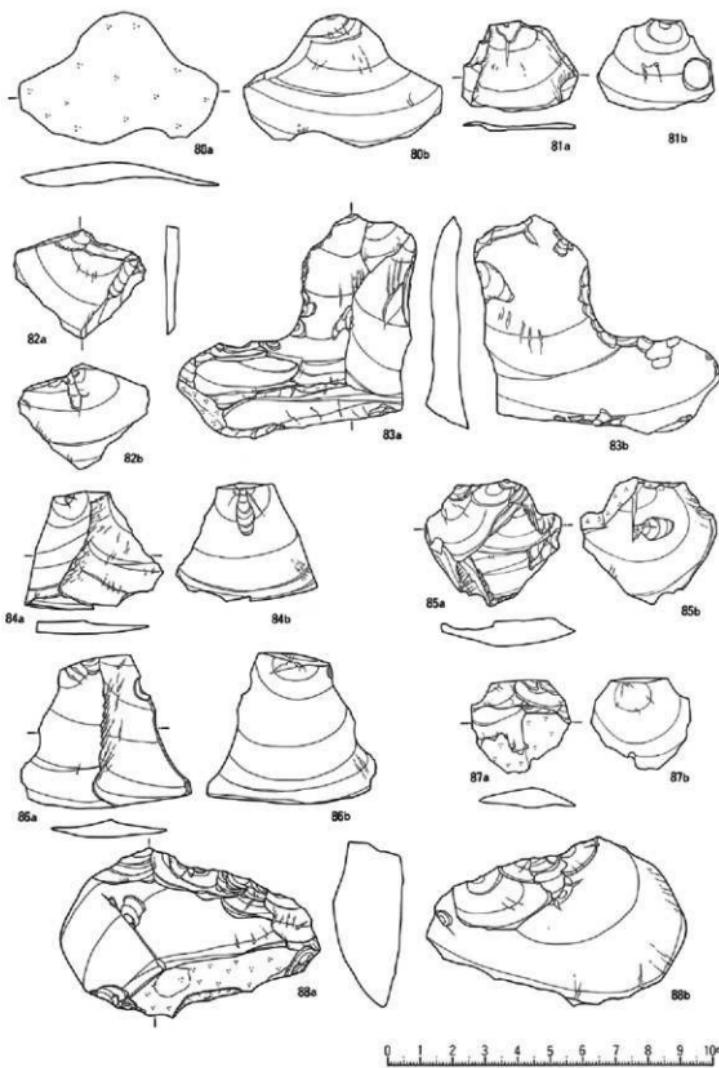
第16図 生蓮寺遺跡第1次調査出土繩文土器拓影、陶磁器実測図(2)



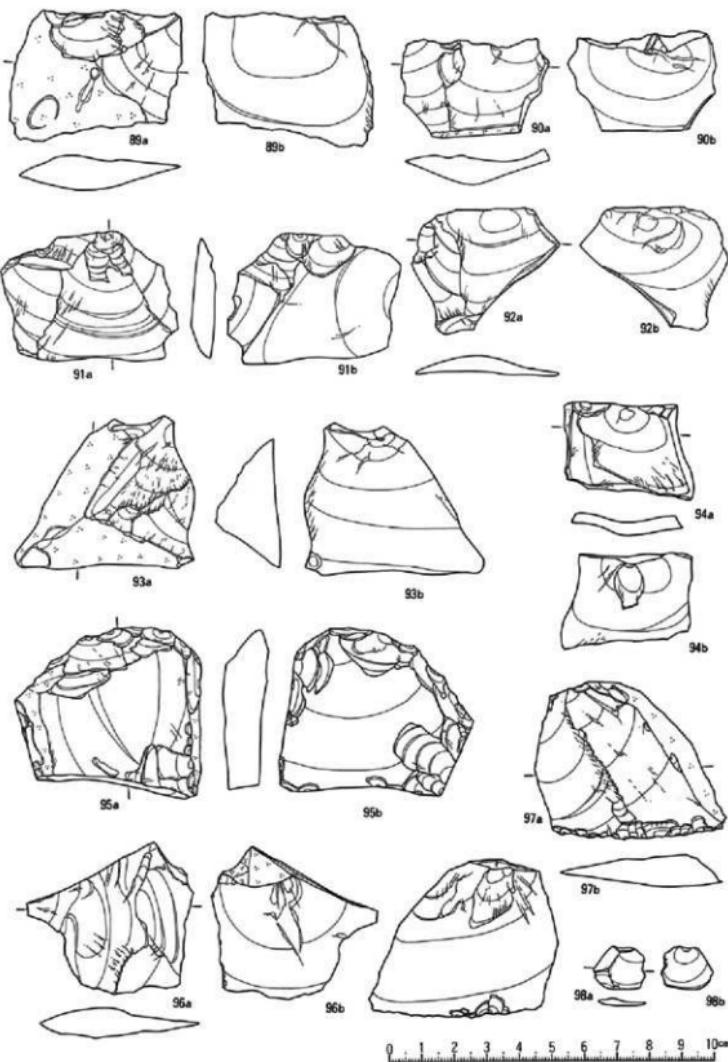
第17図 生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(1)



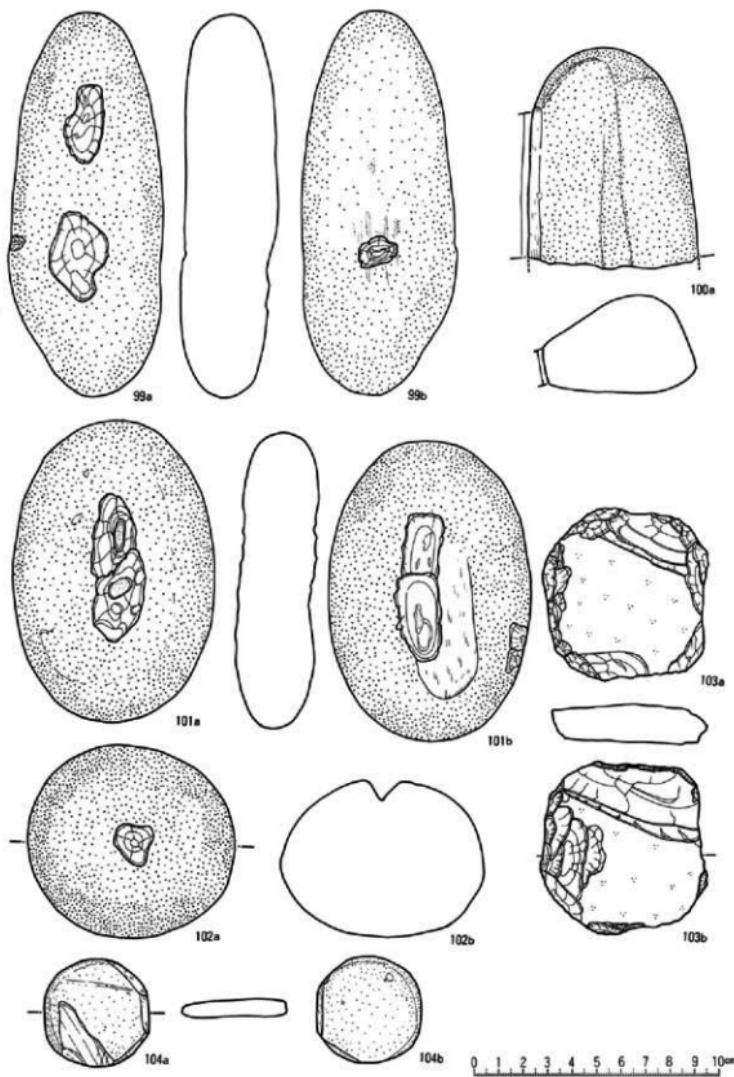
第18図 生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(2)



第19図 生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(3)



第20図 生蓮寺遺跡第1次調査出土の石器実測図(4)



第21図 生蓮寺遺跡第1次調査出土器、石器品実測図

図 版



▲ 発掘前全景(東側より西側を望む)



▲ 発掘区全景(東側より西側を望む)



▲ プラン確認状況



▲ TY15-16-ZY24セクション



▲ TYI3(柱根を有す)



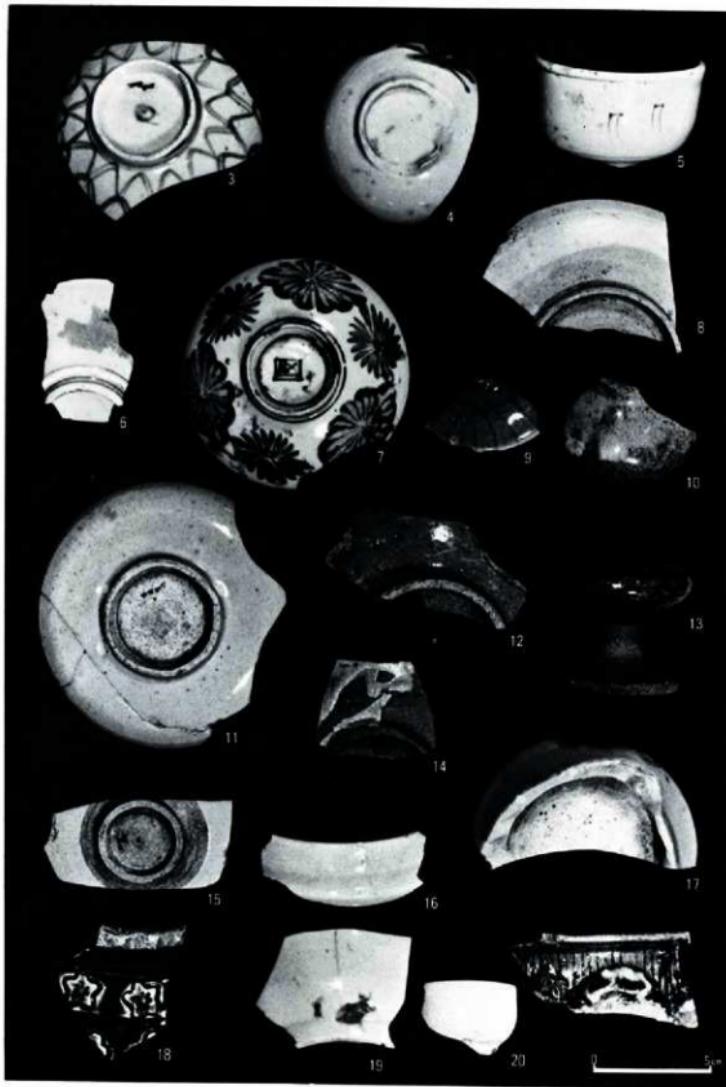
▲ TYI2の根固め石

第四図版
三の丸遺跡第一次調査出土の陶磁器

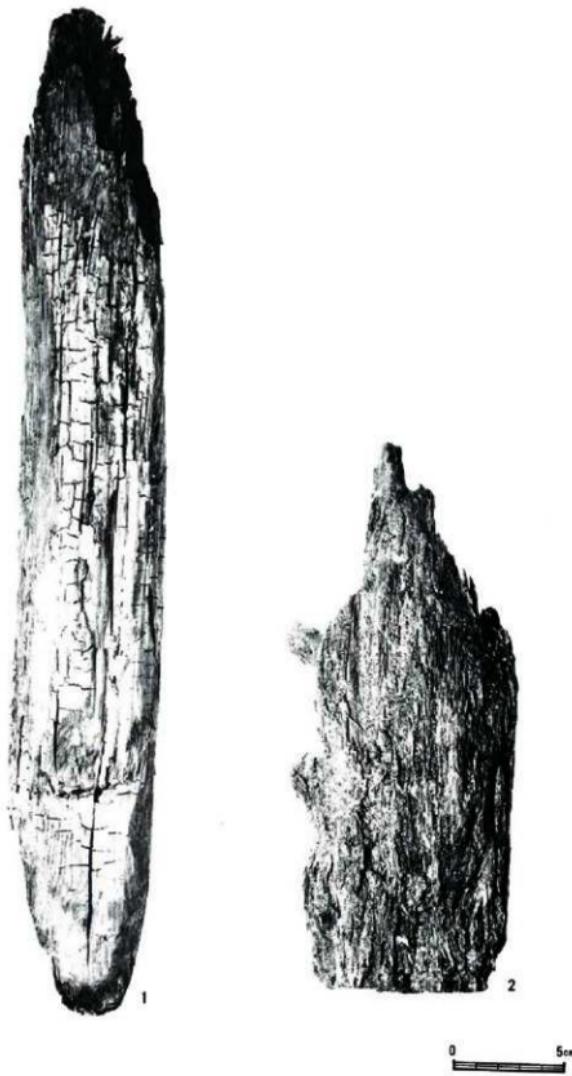


3は古伊万里、4~7は伊万里系、8は本郷上新系、9~10~11は大堀相馬焼、12~13は成島焼、
16は坂窯、17は青磁、18は京樂焼、19はドイツ呉須で地方窯、14・15・20・21は不明

第五図版 三の丸遺跡第一次調査出土の陶磁器



第六図版 三の丸遺跡等一次調査出土の木器



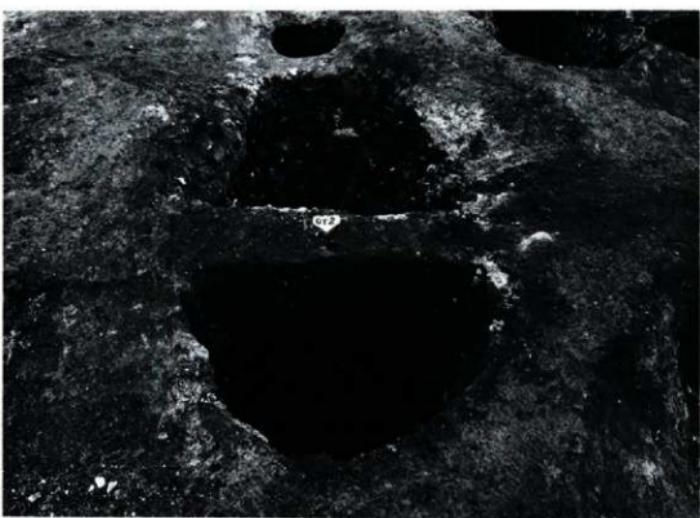
1. TY12出土の杭 2. TY13出土の柱根



▲ 発掘区全景



▲ DY3セクション



▲ DY2セクション

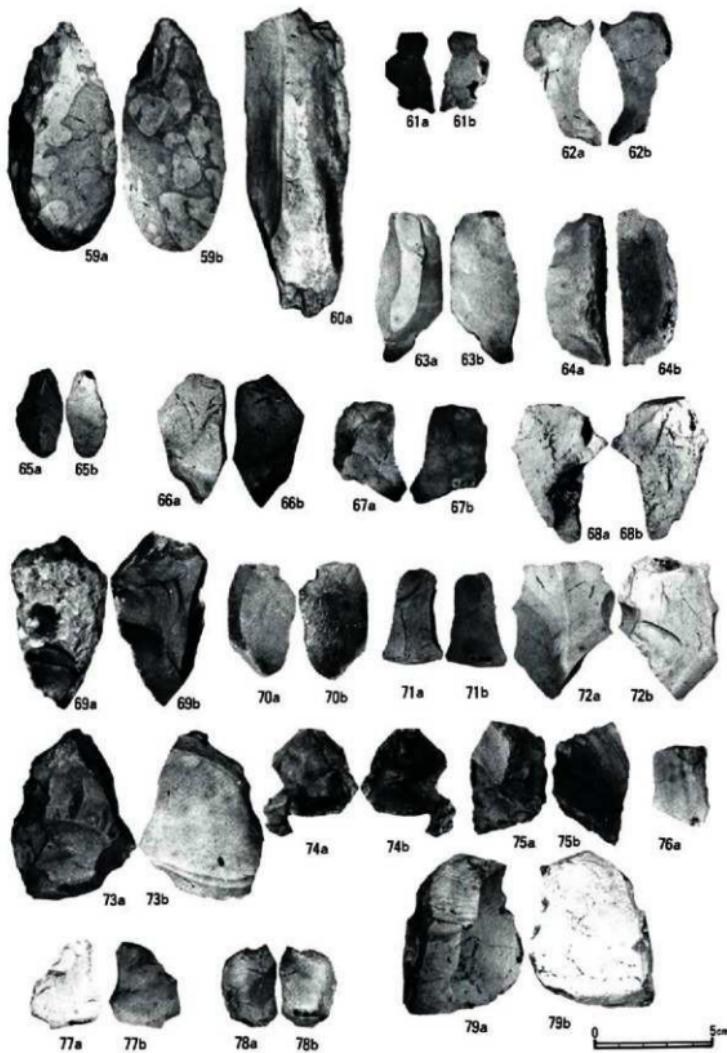
第九図版 生理寺遺跡第一次調査出土の土器



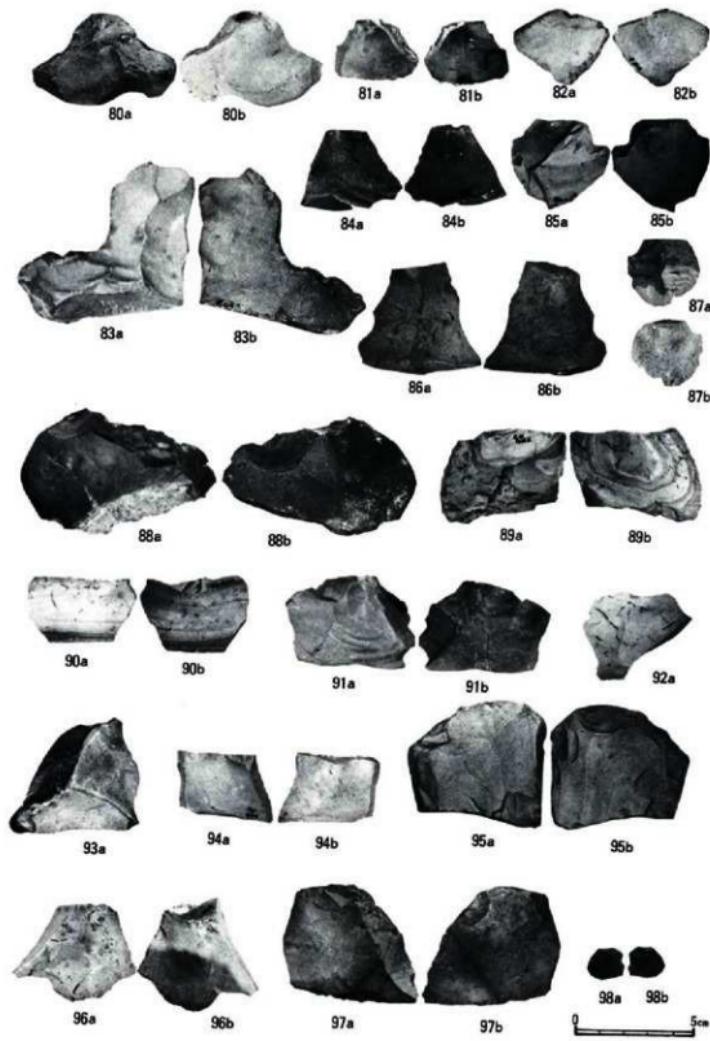
第十四版 生蓮寺遺跡第一次調査出土の土器・陶器・その他の遺物



第十一図版 生還寺遺跡第一次調査出土の石器



第十二図版 生蓮寺道跡第一次調査出土の石器



第十三図版 生國寺遺跡第一次調査出土の石器・石製品



0 5cm

米沢市埋蔵文化財調査報告書第19集
宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書 第1集

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会
〒992 米沢市金池三丁目1-14
☎ (0238)21-6111

印刷 株式会社川島印刷
〒992 米沢市東二丁目6-52
☎ (0238)21-5511